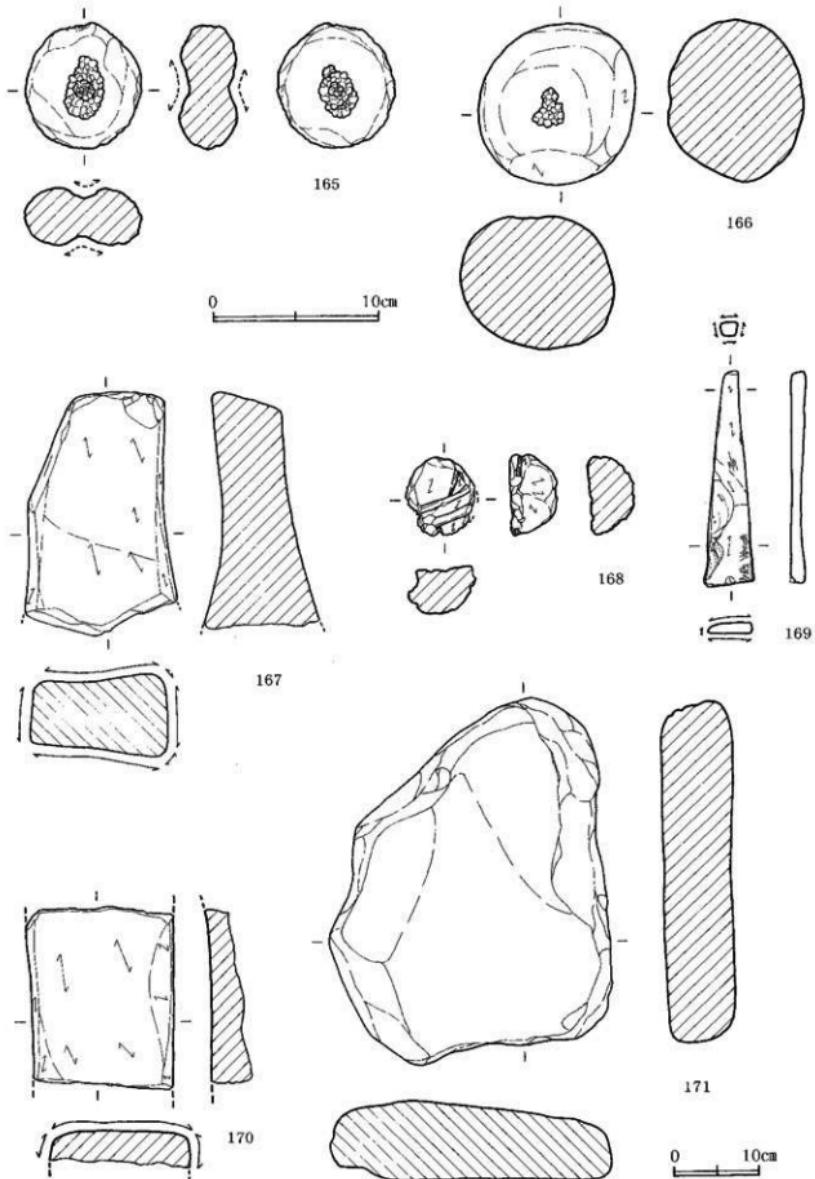


第44図 調査区 出土遺物実測図 (9)

166-168: Tr IIa, 157: Tr IIc, 160-171: Tr IIc, 161-22: Tr IIc, 162-1: Tr IIc



第45図 調査区 出土遺物実測図 (10)

166-168:SK-28,169-171:SA-02

SK-97に西接する円形を呈する土坑である。規模は、径0.78m、検出面から床面までの深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK-99

SK-98の東0.4mで検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.83m、短径0.57m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK-103

SK-93の西7mで検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.95m、短径0.83m、検出面から床面までの深さ24cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK-104

SK-103の西0.5mで検出された、円形を呈する土坑である。規模は、径0.68m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK-112

II区の西部で検出された、円形を呈する土坑である。規模は、径0.82m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK-115（第34図）

規模は、0.84×1.15m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK-121

II区の中央やや東側で検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.92m、短径0.65m、検出面から床面までの深さ15cmを測る。遺物は出土していない。

#### SK-123

SK-121の南12mで検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.98m、短径0.83m、検出面から床面までの深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

### 出土遺物

IIIc層上面での遺構検出の際、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・中世国産陶器・輸入陶磁器・鉄器・石器が出土した。弥生土器は、甕の底部片が出土した。土師器は、甕の口縁部・底部片、壺の口縁部・底部片、鉢の口縁部・底部片、高坏の口縁部・脚部片、塊の底部片、皿やコップ型土器などが出土した。須恵器は甕と蓋の破片が出土した。土師質土器は皿が2点出土した。中世国産陶器は、擂鉢の口縁部が出土した。輸入陶磁器は、青磁の碗・白磁の碗・口禿げ皿・皿が出土した。鉄器は鉄鎌が2点出土した。石器は、ナイフ形石器・細石刃・打製石鎌・石鎌未製品・石匙・石匙未製品・扁平打製石斧・磨製石斧・スクレイバー、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片、敲き石兼磨石・凹石・砥石が出土した。

#### 第4節 小結

緩斜面上に位置する内牧遺跡は、比較的遺構の残りが良く、古墳時代から中世までの遺物と遺構が検出された。ナイフ形石器や細石刃が出土したが、旧石器時代の遺構は検出されなかった。また、縄文土器や弥生土器も出土したが、遺構は検出されなかった。

古墳時代は、竪穴住居が1基のみで、遺物の出土も少ないとから定住化しなかったと思われる。

古代以降になると、遺構が爆発的に増加する。遺構は、遺跡北側に集中して検出され、特に掘立柱建物は、北側に密集して検出されていることから、生活面は遺跡の北側であったと思われる。掘立柱建物は、主軸方位の方向で大きく、A：主軸方位が北西～西北西方向、またはそれと直交するもの、B：主軸方位が西北西～西方向、またはそれと直交するもの、C：主軸方位が西～西南西方向、またはそれと直交するものの3つに分けられる。Aは調査地の北東部に集中しており、Bは調査地の北部に散在してみられ、Cは調査地の北部にみられ、時期は、主軸方位が北西方向から西方向へ変化していくと思われることから、A→B→Cと移行していくと考えられ、Aには11～12世紀と思われるSB-01が属することから11～13世紀が想定される。B・Cは不明であるが、B・Cとともに、南接する古屋敷遺跡でB・Cと主軸方位が同方向の建物群があり、Bは12～14世紀、Cは15世紀以降と推定される。また、建物群の密集地の中央に当たる部分では、方形を呈する柱穴の2×2間の4面に廟を持つ掘立柱建物が検出されている。えびの市では、初の検出例で、その特殊性から拠点的集落であったと思われる。

表1 出土遺物觀察表（1）

表2 出土遺物観察表(2) 土器部・土師質土器・須恵器・中世窯業陶器

No	出土地	種類	備考	法量(m)		測量			底土	底灰	色調		備考		
				口径	底径	厚さ	外	内			外	内			
新305 54	II区 <180> 1区 Ⅲ層	土器部	甕	-	73	-	白色ナガ 底付ナガ	白粉ナガ →1分	砂を含む	やや黄	赤褐色 赤褐色	暗茶褐色	新305 55		
55	1区 Ⅲ層	土器部	甕	-	63	-	底付ナガ-ナガ	-	白粉を含む	やや黄	淡黃	淡黃	新305 56		
56	II区 IIa-1層	土器部	甕	-	70	-	同上ナガ	-	砂色を含む	やや黄	褐色-淡褐色	褐色-褐色	新305 57		
57	II区 S460 1区 SB-35	土器質土器	甕	130	95	34	同上ナガ	同上ナガ	赤白色粉を含む	やや黄	褐色-褐色	褐色-褐色	新305 58		
58	1区 SB-35	土器質土器	甕	33	49	15	同上ナガ	同上ナガ	赤色粉を含む	黄	灰-灰黄	灰-灰黄	新305 59		
59	II区 SB-71 II-III区 II-IV-5層	土器部	甕	74	74	17	-	同上ナガ	同上ナガ	砂を含む	やや黄	淡黃	淡黃	新305 60	
60	II-III区 II-IV-5層	土器部	コップ型	-	37	-	-	-	砂を含む	やや黄	淡黃	淡黃	新305 61		
61	II区 II-IV-5層	土器部	甕	-	-	-	側工具ナガ	砂を含む 多く含む	やや黄	明褐色-褐色	明褐色-褐色	明褐色-褐色	新305 62		
62	II区 <145>	復原品	甕	-	-	-	平行タキ	同上ナガ	白色を含む	灰	青青灰-褐色-灰	青青灰-褐色-灰	青青灰-褐色-灰	新305 63	
63	II区 II-IV-5層	復原品	甕	-	-	-	格子タキ	同上ナガ	白色を含む	黄	淡黃-褐色	淡黃-褐色	淡黃-褐色	新305 64	
64	II区 <237>	復原品	甕	-	77	-	同上ナガ	同上ナガ	砂を含む	黄	淡黃-褐色	淡黃-褐色	淡黃-褐色	新305 65	
65	II区 II-IV-5層	復原品	甕	-	136	-	-	同上ナガ	同上ナガ	白色を含む	黄	淡黃-褐色	淡黃-褐色	淡黃-褐色	新305 66
66	II区 Ⅲ層	中世復原品	復原	296	-	-	同上ナガ	同上ナガ	砂を含む	黄	淡黃-褐色	淡黃-褐色	淡黃-褐色	新305 67	
67	II区 <206>	中世復原品	大甕	-	-	-	工具ナガ	工具ナガ	砂を含む	やや黄	淡黃	淡黃	淡黃		

表3 出土遺物観察表(3) 開磁器

No	出土地	種類	容積	法量(m)			開裂-枝條	鉢形	底土色	色調		采地	年代-備考
				口径	底径	厚さ				外	内		
新405 72	II区 SK-28	青磁	瓶	152	-	-	-	同上	淡黃	オリーブ灰	オリーブ灰	現采地	14世紀-15世紀
73	II区 SK-27	青磁	瓶	172	62	60	細落分文	同上	淡黃-白色	オリーブ灰	オリーブ灰	現采地	13-14世紀
74	II区 SK-27	青磁	瓶	166	66	60	刺毛落分文	同上	淡黃-白色	オリーブ灰	オリーブ灰	現采地	14-15世紀
75	II区 SB-73	青磁	瓶	158	-	-	-	-	淡黃	淡黃	淡黃	現采地	14世紀-15世紀
76	II区 SB-73	青磁	瓶	129	-	-	-	-	淡黃	オリーブ灰	オリーブ灰	中國	14世紀-15世紀
77	II区 SK-11	青磁	瓶	148	-	-	細裂痕	-	淡黃	淡黃	淡黃	現采地	14世紀-15世紀
78	II区 SK-27	青磁	器物小	-	-	-	-	淡黃	白-青	白	淡黃	現采地	14世紀-15世紀
79	II区 SA-41	白磁	碗	146	-	-	-	-	白-白褐	乳白	乳白	中國	12-13世紀
80	II区 H-26	白磁	碗	-	71	-	-	外壁	白-白褐	乳白	透明	中國	12-13世紀
81	II区 <715>	白磁	碗	-	61	-	-	外壁	白	透明	透明	中國	14世紀
82	II区 <625>	白磁	口付花瓶	-	-	-	-	白	淡乳白色-乳白	淡乳白色-乳白	淡乳白色-乳白	中國	13-14世紀
83	II区 <245>	白磁	口付花瓶	108	-	-	-	白	白	乳白	乳白	中國	13-14世紀
84	II区 H-26	白磁	口付花瓶	114	-	-	-	白	白	乳白	乳白	中國	13-14世紀
85	II区 H-26	白磁	口付花瓶	112	66	30	-	白	白	乳白	乳白	中國	13-14世紀
86	II区 <245>	白磁	瓶	-	92	-	-	白	白	乳白-半透明	乳白-半透明	中國	14-15世紀

表4 出土遺物観察表(4) 鉄器・鉄製品

No	出土地	器種	法量(m)			材質	備考
			長さ	幅さ	厚さ		
新378 34	II区 SK-28	铁瓶	52	14	4	-	铁
35-394 70	II区 II-IV-5層	铁瓶	58	20	2	-	铁

No	出土地	器種	法量(m)			材質	備考
			長さ	幅さ	厚さ		
71	II-III区 E層	铁瓶	52	8	2	-	铁

表5 出土遺物観察表(5) 素製品

No	出土地	種類	容積	法量(m)			底土	底灰	色調		備考	
				外	内	面			外	内		
新305 68	I区 H-26	土器部	厚度上15cm	-	-	-	-	-	15cmの土器色 を含む	やや不良	黄褐色-褐色	淡褐色-褐色
69	II区 <564>	土器部	土堆	長:69 幅:46 高:14	ナガ	ナゲ	砂を含む	やや良	灰褐色-灰青色	-	-	-

表6 出土遺物観察表 (6) 石器・石製品

No.	出土地	性種	法量 (m)			石材	備考		No.	出土地	性種	法量 (m)			石材	備考
			長さ	幅	厚さ							長さ	幅	厚さ		
64	II-1区	ナイフ形石器	40	14	7	チヤト			130	II-1区	石椎木製品	17	16	4	1	チヤト
65	II-1区	細石刃	18	8	2	黒曜石			131	II-1区	石椎木製品	(22)	(13)	5	1	寅山石?
66	II-1区	石器	23	19	5	1	チヤト		132	II-1区	石椎木製品	23	15	7	2	黒色石質
67	II-1区	石器	24	16	5	2	チヤト		133	II-1区	石椎木製品	(16)	19	6	2	黒曜石
68	II-1区	石器	15	14	1	-	チヤト		134	II-1区	石椎	34	18	7	5	チヤト
69	II-1区	石器	14	15	3	-	黒曜石		135	II-1区	石椎木製品	38	23	7	4	チヤト
70	II-1区	石器	(13)	(9)	(3)	-	黒曜石		136	II SA-02	石椎	36	30	8	11	チヤト
71	II-1区	石器	12	14	3	-	黒曜石		137	II SA-02	小椎	51	28	9	14	チヤト
72	II-1区	石器	17	17	6	1	黒曜石		138	II-1区	石椎	42	(68)	7	20	白色石質
73	II-1区	石器	16	14	13	-	黒曜石		139	II-1区	石椎	62	35	14	20	チヤト
74	II-1区	石器	18	12	3	-	玄山石		140	II-1区	石椎	27	45	5	5	黑色石質
75	II-1区	石器	21	25	3	-	チヤト		141	II SA-01	石椎	35	40	7	8	チヤト
76	II-1区	石器	13	14	3	-	黒曜石		142	II-1区	石椎	30	40	5	5	チヤト
77	II-1区	石器	16	16	4	-	黒曜石		143	II-1区	石椎	23	31	7	4	チヤト
78	II-1区	石器	21	16	4	1	チヤト		144	II-1区	石椎	39	(55)	7	12	チヤト
79	II-1区	石器	26	19	4	1	チヤト		145	II-1区	石椎	29	44	6	6	チヤト
80	II-1区	石器	(29)	18	4	1	玄山石		146	II-1区	石椎	44	46	10	17	チヤト
81	II-1区	石器	18	16	1	-	チヤト		147	II-1区	石椎	33	20	11	7	黒曜石
82	II-1区	石器	(11)	(12)	3	-	チヤト		148	II-1区	石椎	24	42	6	5	チヤト
83	II-1区	石器	(16)	(15)	4	-	チヤト		149	II-1区	石椎	27	18	7	3	チヤト
84	II-1区	石器	23	17	3	1	チヤト		150	II-1区	石椎木製品	48	16	8	5	チヤト
85	II-1区	石器	(29)	(16)	3	-	チヤト		151	II-1区	石椎木製品	(44)	44	7	14	チヤト
86	II-1区	石器	0.9	0.9	4	-	黒曜石		152	II-1区	石椎木製品	(34)	66	9	13	チヤト
87	II-1区	石器	0.9	(13)	3	-	黒曜石		153	II-1区	石椎木製品	(39)	(44)	11	17	チヤト
88	II-1区	石器	15	15	3	-	チヤト		154	II-1区	石椎木製品か 石器	71	39	10	22	安山岩
89	II-1区	石器	20	15	4	1	黒曜石		155	II-1区	扁平打製石斧	(66)	(64)	11	50	砂岩
90	II-1区	石器	18	16	3	-	安山岩		156	II SA-02	廢棄石斧	90	38	28	72	廃棄石質?
91	II-1区	石器	25	14	3	1	黒曜石		157	II SA-02	内器	(69)	41	15	27	チヤト
92	II-1区	石器	(17)	(12)	3	-	玄山石?		158	II SA-02	次加工のある 内器	25	20	3	1	黒曜石
93	II-1区	石器	15	15	4	-	黒曜石		159	II-1区	使用痕のある 内器	77	37	12	28	砂岩
94	II-1区	石器	15	15	3	-	黒曜石		160	II-1区	47x47mm 内器	43	53	12	21	頁岩
95	II-1区	石器	16	15	2	-	玉類		161	II-1区	スクリュー	41	40	12	36	チヤト
96	II-1区	石器	(22)	(16)	4	1	黒曜石		162	II-1区	スクリュー	(52)	78	10	37	寅山石?
97	II-1区	石器	(28)	(15)	3	-	玉類		163	II-1区	スクリュー	45	39	19	31	黒曜石
98	II-1区	石器	29	18	3	1	チヤト		164	II SA-02	スクリュー	46	22	8	6	真石
99	II-1区	石器	(18)	(13)	3	-	チヤト		165	II-1区	円錐石 (無孔)	77	70	36	226	加久藤 御前山台
100	II-1区	石器	0.4	(12)	3	-	チヤト		166	II SK-28	縫合石 ナット	104	95	81	120	砂岩
101	II-1区	石器	(14)	16	3	-	黒曜石		167	II-1区	内器	(149)	93	(20)	120	砂岩
102	II-1区	石器	27	14	4	1	チヤト		168	II SK-28	端石?	49	52	30	17	鰐石
103	II-1区	石器	29	(30)	5	3	チヤト		169	II SK-28	端石?	132	31	7	40	泥炭
104	II-1区	石器	(22)	(14)	3	-	チヤト		170	II SK-28	端石	(112)	99	(25)	402	砂岩
105	II-1区	石器	23	19	5	3	チヤト		171	II SA-02	合石	443	343	84	2200	加久藤 御前山台

## 第6章 まとめ

手仕山・古屋敷・内牧遺跡からは、旧石器時代から近世までの多量の遺物が出土し、縄文時代から近世までの遺構も多数検出された。特に9～15世紀にかけての集落としては市内でも屈指の遺跡であることが確認された。住居の変遷を追って遺跡の特徴を考えてみたい。

### 縄文時代

早期から晩期までの遺物が出土しており、特に手仕山遺跡では、早期の遺物が多量出土した。しかし、東部丘陵平坦面で後期もしくは晩期の竪穴住居が3基検出されたのみであることから、居住空間というよりも、活動空間であったと思われる。

### 弥生時代

南部緩斜面と東部丘陵平坦面上に間仕切り住居が営まれる。住居数が少ないと定住化には至らなかったと思われる。石包丁が出土していることから西から南にかけての緩斜面上で水田が営まれていたと想定される。

### 古墳時代

主に南部緩斜面と東部丘陵平坦上に竪穴住居が営まれ、住居数が多くなることから定住化に至ったと想定される。また、24号住居からは金銅製の帶金具もしくは馬具が出土していることから拠点的集落であったことが想定される。

### 古代Ⅰ期

北部緩斜面、南部緩斜面、東部丘陵に竪穴住居が短い期間であるが営まれ、掘立柱建物がこの地区に建てられた時期である。掘立柱建物は、主軸方位が西北西～西、北北東～北方向の建物群で構成され、南部緩斜面上に集中しており、東部丘陵南東隅に若干みられる。建物の重複から3小期に分けられる。時期は、85号建物の柱穴から建物廃棄後に埋められた「鷹」の字を記された墨書き土器が出土していることから、9世紀後半～10世紀と思われ、また、その墨書き土器に記されている「鷹」の字から、養鷹・鷹狩と関わりある有力者の存在が窺え、この時期は拠点的集落であったことが想定される。

### 古代Ⅱ期

主軸方位が北西～西北西、北東～北北東方向の建物群で構成され、北部緩斜面北側に集中してみられる。方形を呈する柱穴の1号建物が初期のもので、それを中心に展開していくものと想定さ

れる。また、SB-01の特殊性から拠点的集落を伺わせる。建物の重複から4小期に分けられる。時期は11~12世紀である。

#### 中世Ⅰ期

主軸方位が西、北方向の建物群で構成され、南部緩斜面上と東部丘陵平坦面上に万遍なくみられる。建物の重複から4小期に分けられ、時期は12世紀末~13世紀である。

#### 中世Ⅱ期

主軸方位が西北西、北北東方向の建物群で構成され、北部緩斜面上と南部緩斜面南側と東部丘陵平坦面南側にみられる。建物の重複から4小期に分けられる。時期は13~14世紀と想定される。

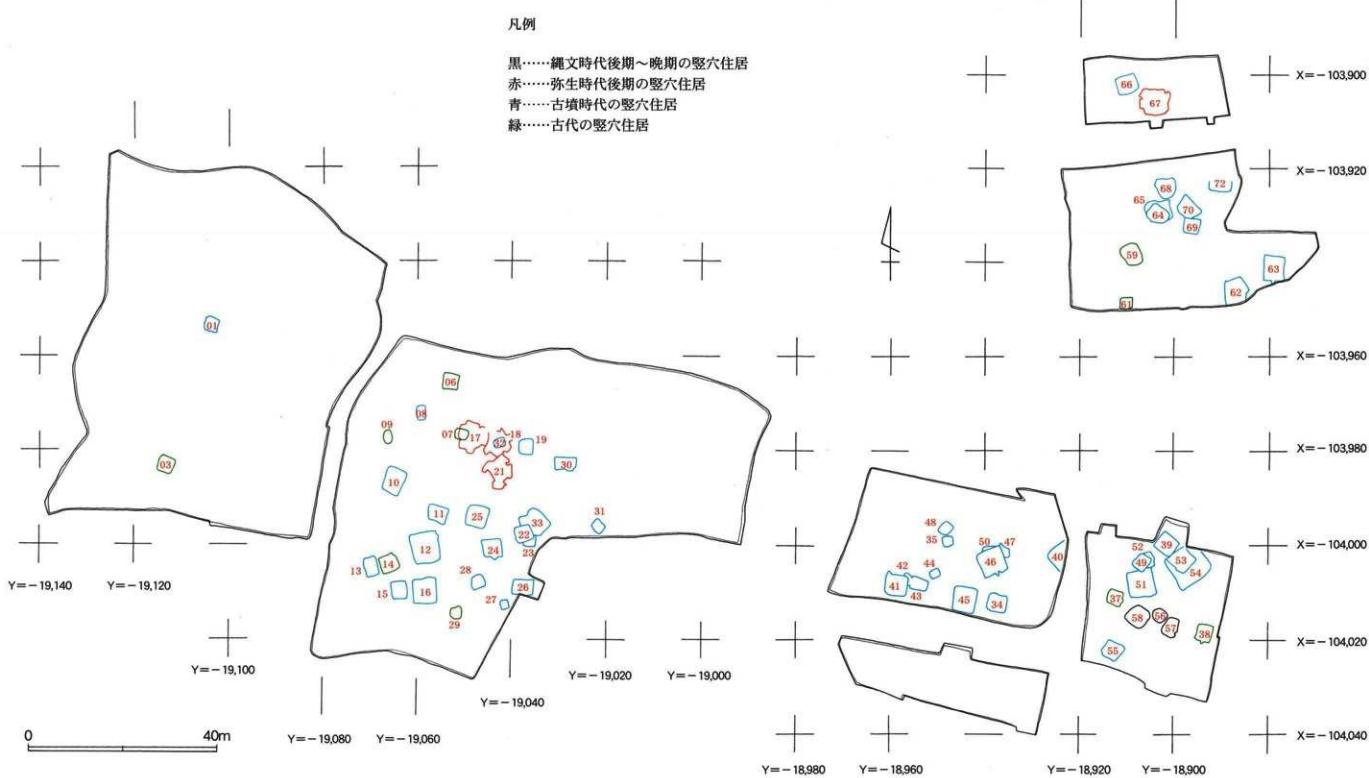
#### 中世Ⅲ期

主軸方位が西~西南西、北~北北西方向の建物群で構成され、主に北部緩斜面上、東部丘陵平坦面上にみられる。建物の重複から3小期に分けられる。時期は15世紀以降と想定される。

#### 近世~近代

東部丘陵平坦面上に農道の側溝（16号溝）が、VII区の北部では、31・32号溝が掘削される。また、同区の東部から北東部にかけては畑が耕作され、その後埋められる。

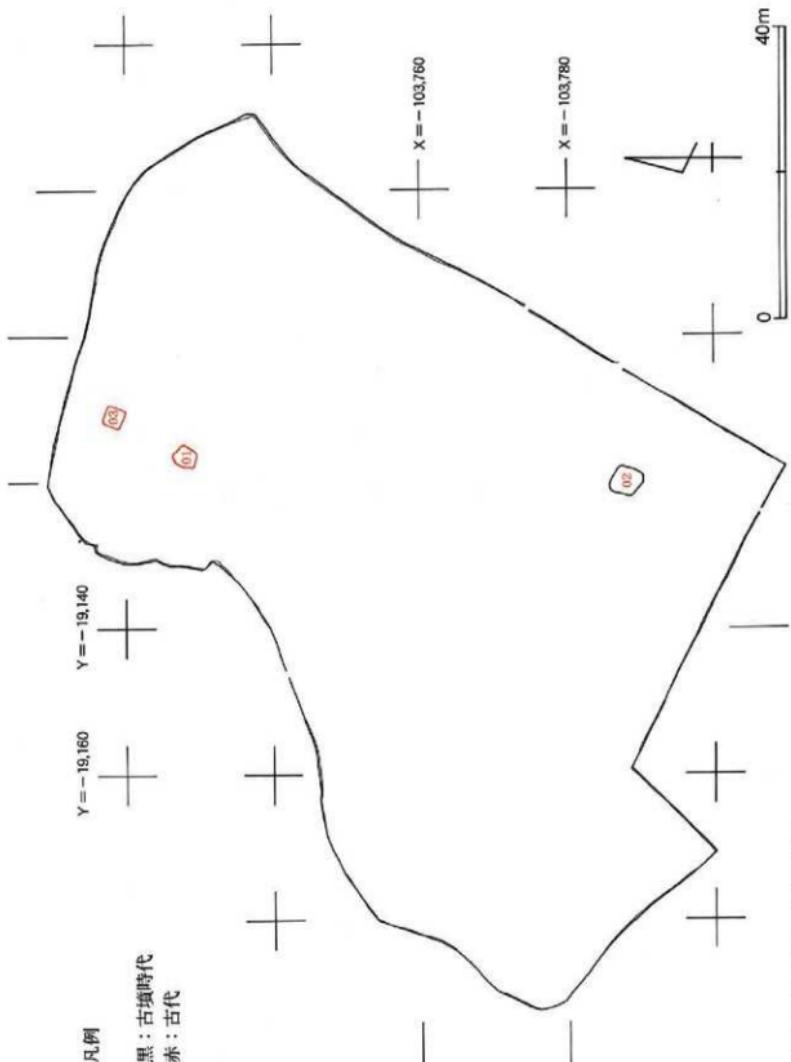
東川北地区遺跡群は、部分的に断絶があるものの、縄文時代から現代まで綿々と営まれた集落であることが分かる。特に、9世紀後半から12世紀にかけて、拠点的集落として繁栄していたと思われる。また、遺跡群の南西には14世紀後半から15世紀前半に北原氏の居城で、郷の中心地的場所であつた徳満城があり、手仕山遺跡にはその徳満城の出城的機能を有していた山城が構築されていることから、その影響を受けて集落が繁栄していたと思われる。その後、集落は東の谷からそれを越えた丘陵平坦面や南に移動しながら現在に至り、緩斜面と丘陵平坦面は耕作地として使用されることとなったと思われる。



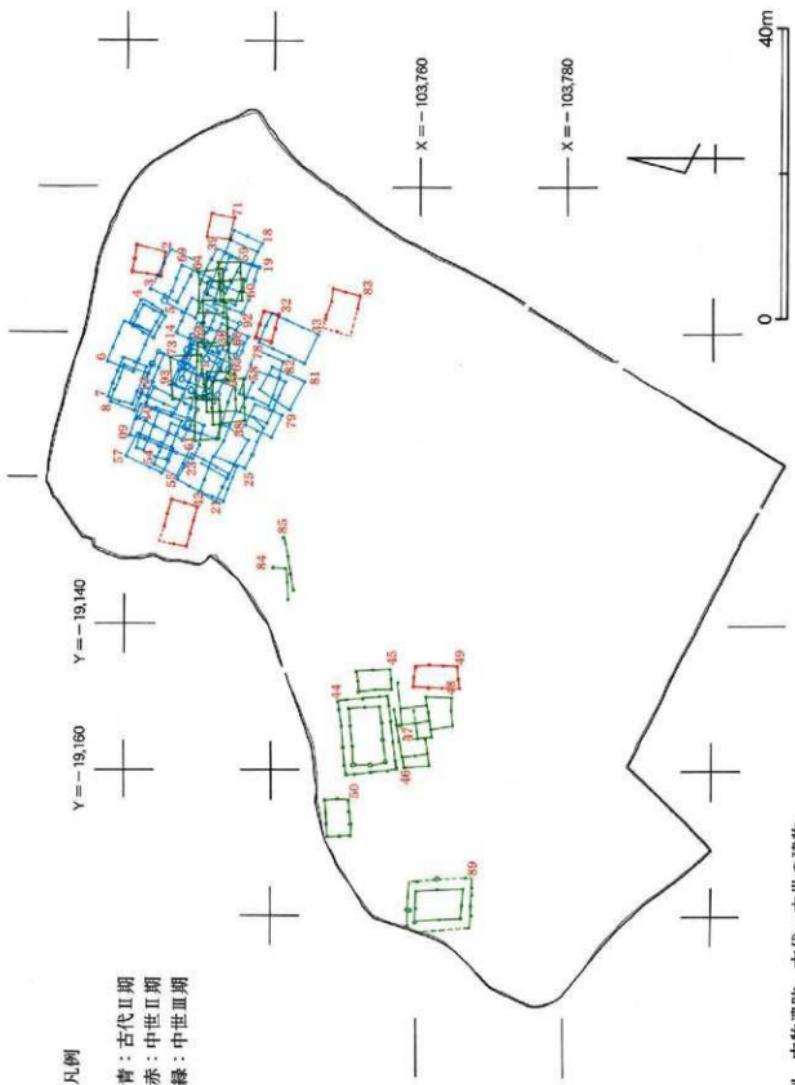
第46図 古屋敷遺跡 縄文～古代の住居



第47図 古屋敷遺跡 古代～中世の建物



第48図 内牧遺跡 古墳～古代の住居



第49図 内牧遺跡 古代～中世の建物

## 第7章 彦山第5遺跡

## 第7章 彦山第5遺跡

### 第1節 はじめに

平成14年4月30日、耕地課および西諸県農林振興局との協議において、東川北地区圃場整備事業の追加工事に伴う遺跡の有無の照会があった。調査対象地区内においては、彦山第4・第5遺跡が周知されていたため、県文化課が試掘調査を実施した後、再協議することとなった。

平成14年12月10日～11日、調査対象地内の踏査と試掘調査が実施された。その結果、調査対象地域は彦山第5遺跡のみとし、旧地形は平坦面が殆ど無い狭長な痩せ尾根であること、西半分は数10cmの客土があり、調査対象となる土層も殆ど削失していることが判明した。

平成15年5月15日、4者による協議を開き、東側の畠地約2,000mについて本調査を実施することに決定した。

### 第2節 遺跡の位置と歴史的環境（第1図）

彦山第5遺跡は、えびの市大字東川北字彦山に位置し、前章の手仕山・古屋敷・内牧遺跡とは約1km東方、標高290～296mの斜面に立地し、氾濫原との比高は60～66mを測る。

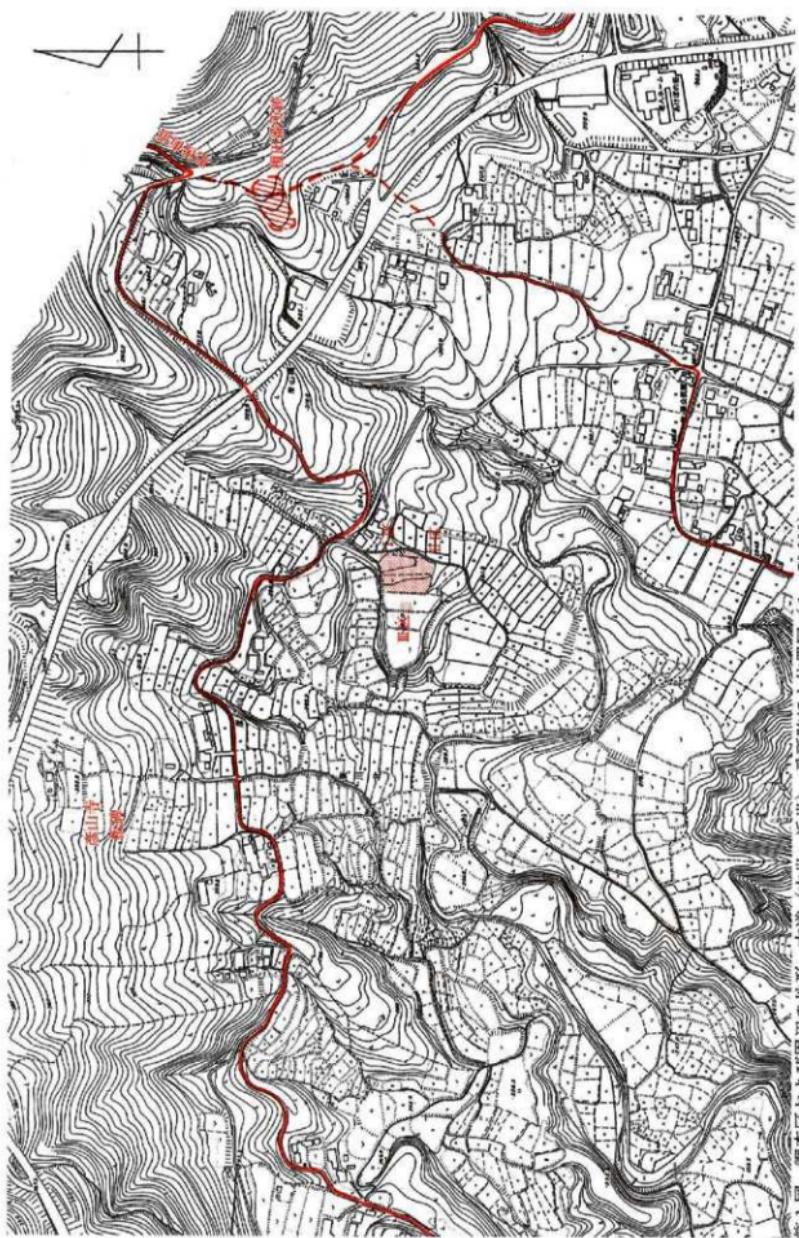
調査地周辺には幾筋もの谷が入り込み、北山特有の地形を成す。遺跡の北側と南東側2.5～3kmには中世以降の古道があり、その中間には蛇行する急流「彦川」がある。2条の旧道は近世の肥後街道と合流し、番所が設置されている（複数番所跡）。当番所は、出水、大口、去川と共に薩摩藩4大番所のうちの1つであり、切石や平坦面等が現存する。

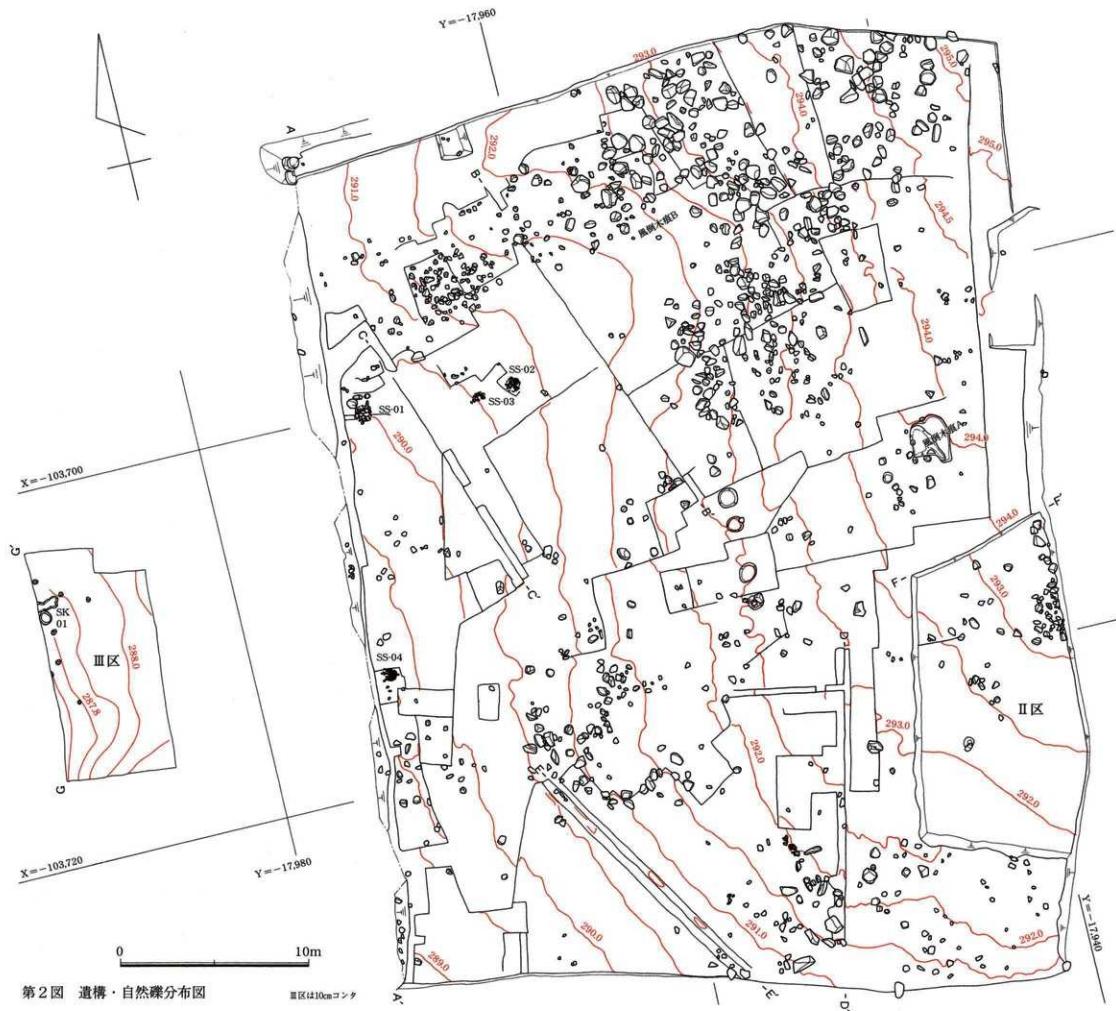
調査地の400m北西には、霧島山系の中腹にある白鳥神社の別当寺で白鳥山満足寺の隠居所であった彦山寺跡がある。廃仏毀釈や明治中頃の球磨街道開削工事によって荒廃していたが、昭和37年、町教育委員会によって復旧された。その際、歴代満足寺住職の墓石や五輪塔、法鏡印塔・板碑・副碑が確認されている。墓石の殆どは加久藤洛結安山岩の板石で、天正15年（1587）のものや元和4年（1618）（3代目）・寛永17年（1640）（6代目）・承応2年（1653）（7代目）・享保13年（1728）・元文2年（1737）の銘がある。五輪塔は直径50cm内外の水輪や地輪が目立つが、殆ど原位置では無い。法鏡印塔は2～3基あったようであるが、原位置では無い。正中2年（1325）建立の板碑は、高さ2.25m・幅0.45～0.53m・厚さ0.3mの角柱で、頂部を三角形に加工している。碑文は10行にわたり、175文字ある。副碑は高さ1.32m・幅0.27mの角柱で、宝光権律師が、恩師覺然師の33回忌供養のために建立した由の碑文69文字がある<sup>①)</sup>。

#### 註

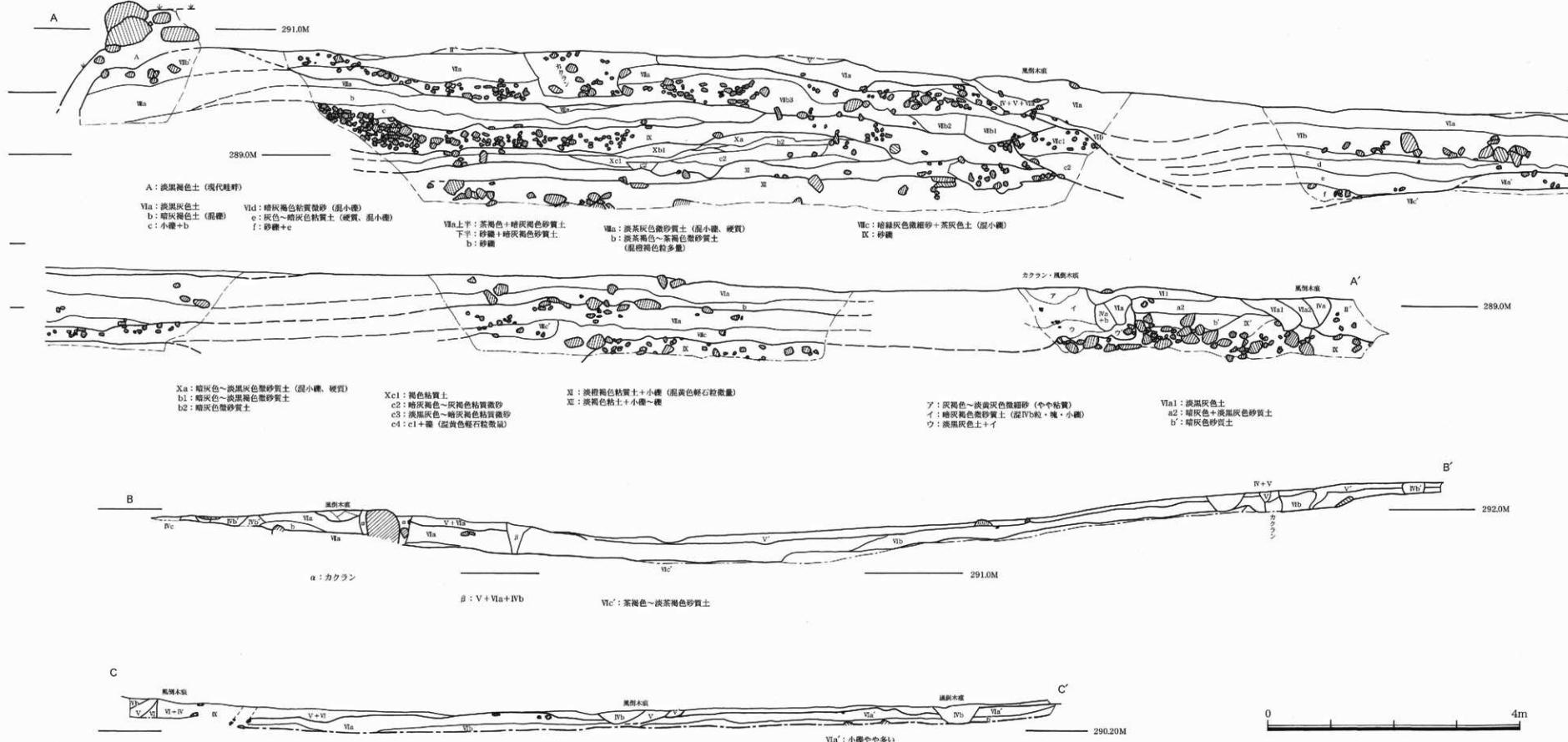
(1) えびの市役所『えびの市史 上巻』1994、同『えびの市史 石塔編』1998

第1図 調査区および周辺の地形・古道（中世～近世）・番所跡・ほか位置図（1：50,000）

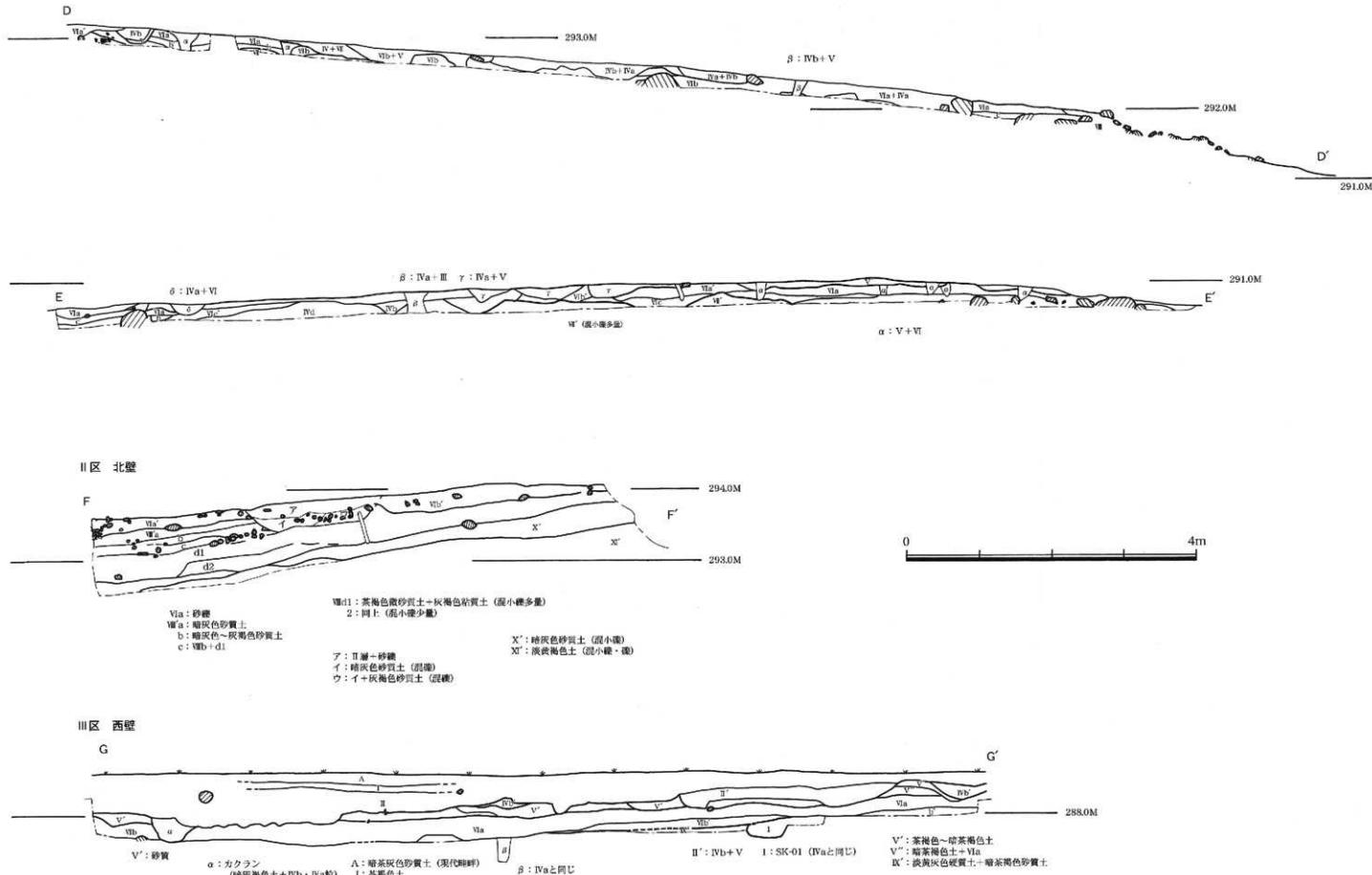




第2図 遺構・自然縦分布図



第3図 調査区断面層序図（1）



第4図 調査区断面層序図（2）

### 第3節 基本的層序

層序は、I区の西壁を基本とし、上からI層：畑耕作土、II層：旧耕作土・畑基盤土・客土（近現代、I層とはほぼ同質）、III層：茶褐色土（風倒木痕Aでのみ確認）、IVa層：2次アカ（IVb層の2次堆積層で、軟質、縄文前期の遺物を含む）、IVb層：アカホヤ火山灰、V層：茶褐色硬質火山灰（西側中央部で厚さ10cm程度、他は数cm～流失）、VI層：黒灰色～暗灰色土（縄文早期の文化層、a～f層に細分、a層は殆ど火山灰、北東側では上部に礫（最大1m位）が大量に混じる、b層以下は加久藤溶結安山岩の風化碎細礫が混じり、e～f層には亜角礫が多い）、VII層：黄褐色～茶褐色土+硬質の暗灰褐色砂質土（下半は小礫～礫が多く混入しb層とした）、VIII層：淡茶灰色～茶褐色微細砂質土～暗綠灰色微細砂混じり（a～c層に細分）、IX層：砂礫層、X層：暗灰色～淡黒灰色～灰褐色微細砂質土（旧表土で、a～c層に細分）、XI層：淡橙褐色粘質土+小礫、XII層：淡褐色粘質土+礫に分別した。

調査区隣接地の古老の話によると、入植した50～60年前は原野で、50～60cmほど削って西方へ土を運んで平坦面に造成したことがわかり、通常見られるIII層（黒灰色土）が全く遺存していない原因が理解できた。なお、火山灰分析の結果では、VII～XII層はAT降下以降の堆積という報告を得た（付篇）。

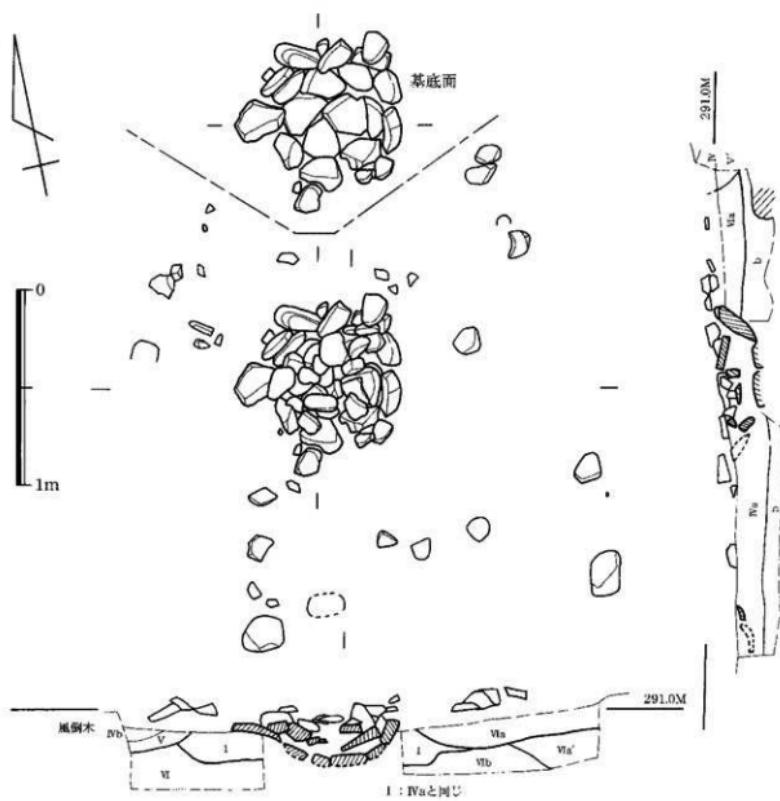
### 第4節 調査の方法と経過

調査対象地においては、アカホヤ火山灰以下の地層は良好に遺存していること、客土から縄文早期の土器片が出土していることから、同期の文化層を包蔵している可能性が高いことの2点を念頭に、表土剥ぎを開始した。畑耕作土は5～20cm、西～南側の斜面端縁においては40～50cmの厚さがある。弥生時代～中世前半の黒色土を主とする遺物包含層は、全く遺存していなかった。I層下部や客土（II層）からは弥生～中世の土師器細片を採取するために若干の遺構を期待してIVa層～IVb層上面で掘削を止めて遺構検出を実施したが、遺構は皆無であった。次にIV層と通常は無遺物層であるV層を掘削し、VI層の上面（縄文早期）を検出していった（I区）。畦畔部は全て除去し、本来の地層を露出させ、基本的層序の把握をした。南東部はVII層まで削失しておりVII層の礫層が露出したことから、一部、X層の淡黒灰色土の調査を目的として礫層を剥ぎ、II区とした。I区の南の畑地もIV層以下が遺存していたが、急斜面であり、工事で削平されないことも確認したことから排水土陥き場にした。反面、I区の西側の水田の西半部はVI層が遺存していることがわかり、遺物の出土が想定される区域をIII区とした。

### 第5節 遺構と遺物

#### 1. 遺構

縄文時代早期（VI層）の遺構は極めて少なく、I区では集石遺構4基のみ、III区では土坑1基のみである。被熟礫は、東南部を除くほぼ全面に散布していたが、土器片や石器・剝片等と同様、流



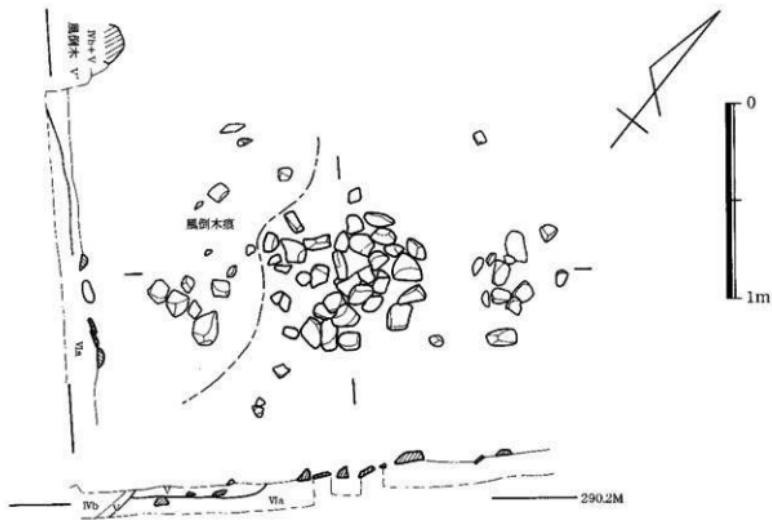
第5図 S S -01 遺構実測図

れ堆積（原位置でない）であると判断した。

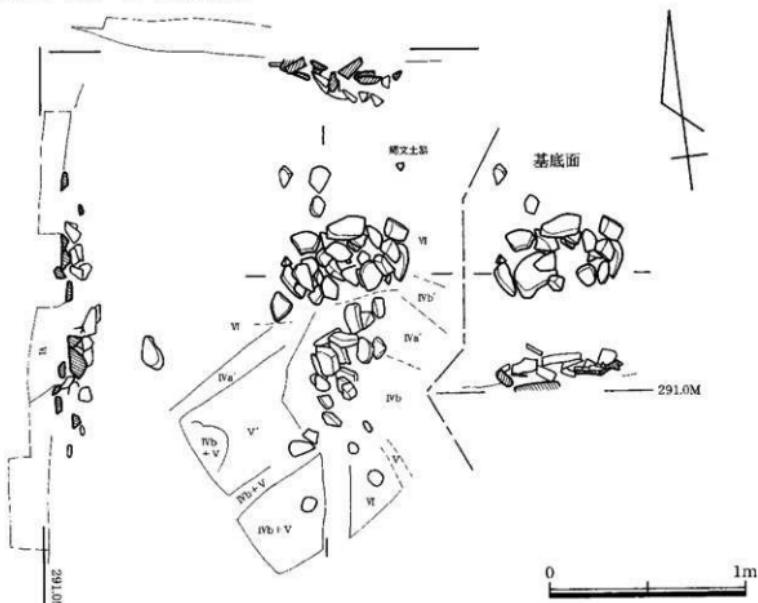
集石遺構の構成礫と被熱礫は全て加久藤溶結安山岩であり、遺跡内で調達できる。自然礫は、桃褐色の溶結円礫を僅かに含むが、殆どは加久藤溶結安山岩で、被熱礫の数倍も検出している。

#### S S -01 (第5図)

I 区の北西部、谷が埋没し終える頃・VI a 層内で構築された集石である。掘り込みは、土層断面観察土手でのみ確認できた。東側はさらに搅乱を受けていることも判明したが、平面プランの検出はできなかった。中央寄りの掌大の礫21個は赤橙色に被熱し、これらを除去すると掌大の礫を20~60度に傾けて外径70~80cm程度の円形に配置している。炭化物や残留有機物は、検出されていない。周辺には被熱した礫が散在するが、原位置ではないと思われる。



第6図 SS-02 遺構実測図



第7図 SS-03 遺構実測図

#### SS-02 (第6図)

01号集石の8m東、浅い谷の北肩寄りで検出した、直径80cm程に被熱礫が配置されたものである。掘り込みは認められず、西側は風倒木によって原位置が保たれていない。構成礫は1辺5~10cmの亜角礫が多く、炭化物等は検出されていない。

#### SS-03 (第7図)

02号の西2mで検出した、直径70cm程に被熱礫を配置したものである。

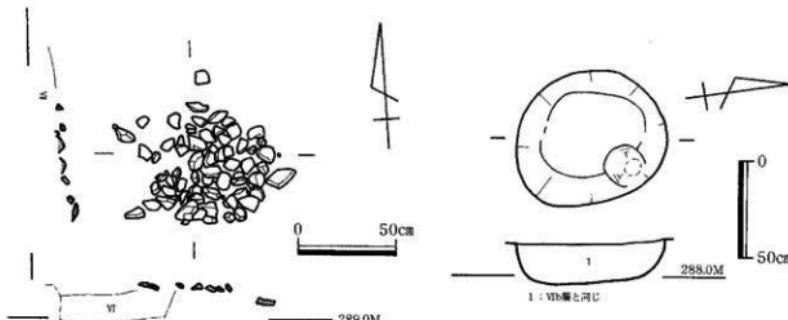
南半分は、風倒木によって横転している。周縁にやや大きめの扁平礫が配置され、西側にのみ掌大の基底石が認められた。掘り込みは認められず、炭化物や穀物も未検出である。

#### SS-04 (第8図)

西側中央部において検出した、拳大の被熱礫60個余を直径60cmに配置したもので、一部、数個が放射状に延びている。掘り込みは無く、炭化物や有機物も未検出である。

#### SK-01 (第9図)

Ⅲ区の北西部において、長径78cm・短径66cmの橢円形を呈する土坑を検出した。深さは、18~21cmを測る。覆土はVI a層であり、人為的掘り込みと判断したが、出土遺物は無い。また、壁面の土色変化等も認められず、機能は不明である。



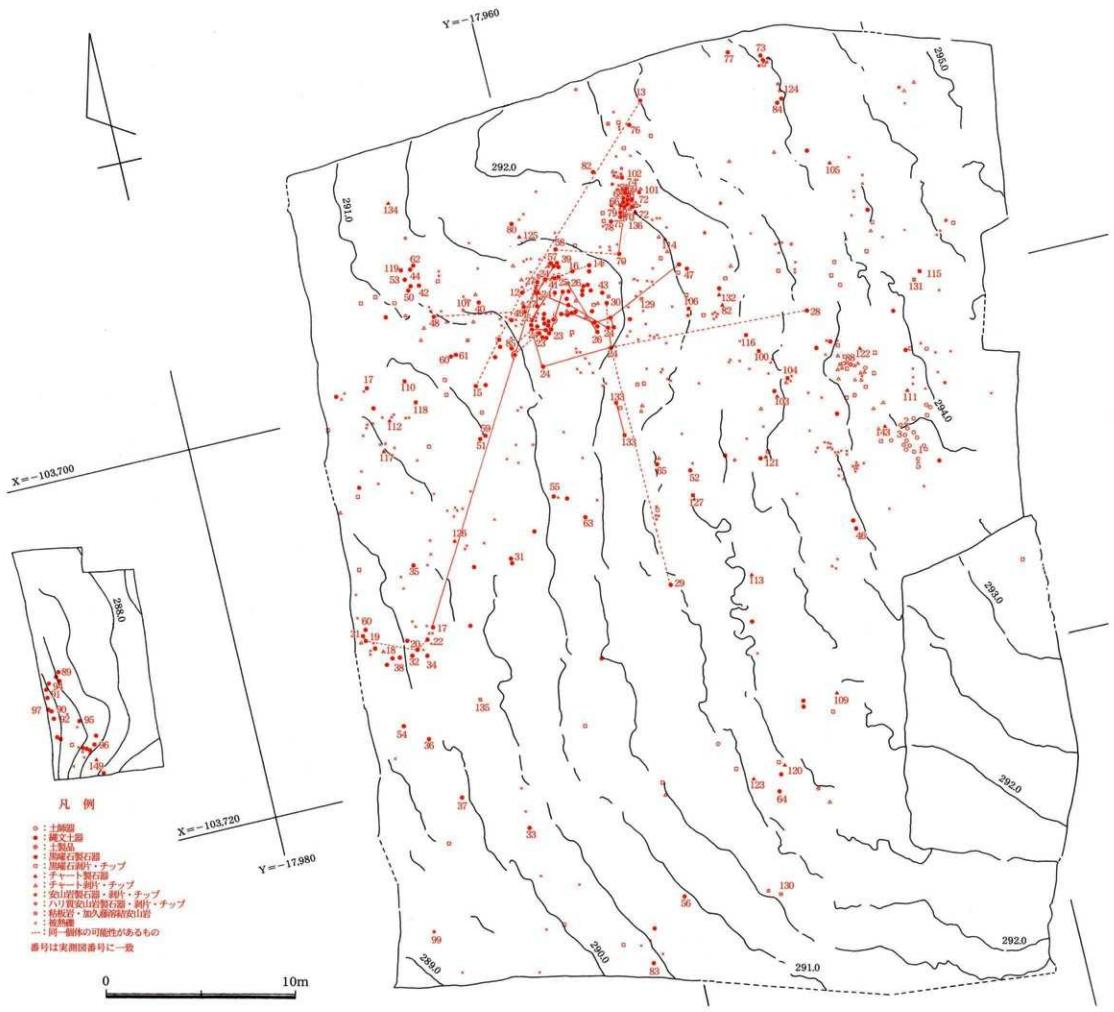
第8図 SS-04 遺構実測図

#### 2. 出土遺物

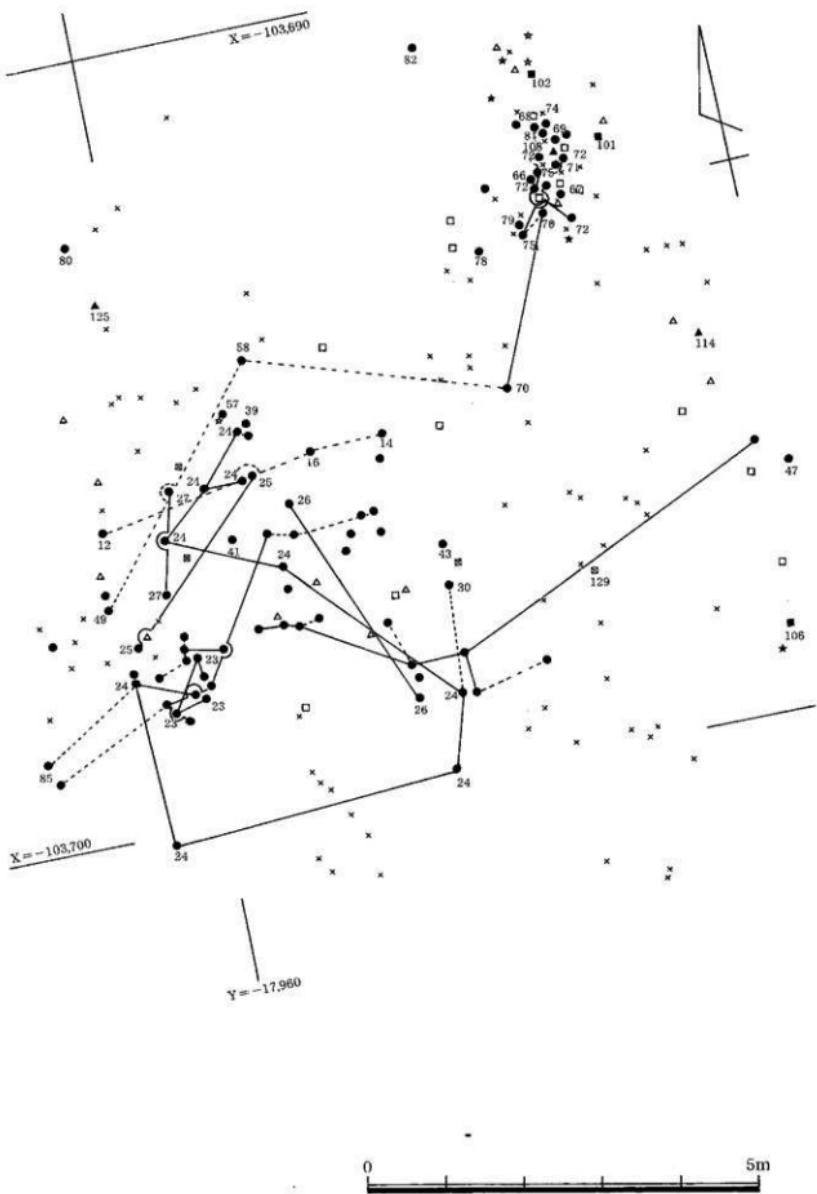
I・II層や現代の溝状遺構・攪乱からは、弥生時代終末~古墳時代前期の土器片や古代~中世の土器片の碎細片が若干のほか、中世の青磁や褐釉陶器が出土した(第12図)。当該期の何らかの遺構が存在したのであろうが、文化層は全て開墾によって消失している。

I区のVI層上面においては、IV b~VII層を中心とする直径2~5m程の風倒木痕が多く認められた。これら風倒木痕は殆ど無視したが、遺物が認められた2ヶ所(A・B)については掘り下げて、遺物を取り上げた(第10・11図)。風倒木痕内のIV a層からは縄文時代前期の土器片(第16図-77・82・83)や石器(第21図-142)等が数ヶ所で検出されたが、出土量は僅かである。

第9図 Ⅲ区 SK-01 遺構実測図

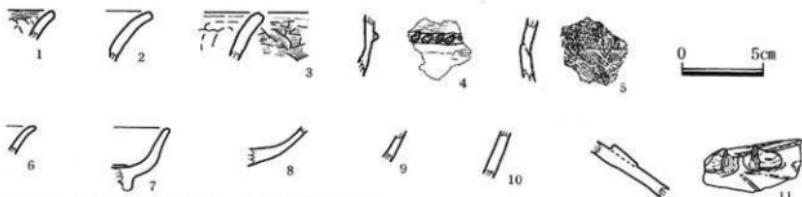


第10図 出土遺物分布図



第11図 密集地点 遺物分布図

記号は第10図と同じ



第12図 調査区出土土器・輸入陶磁器実測図

表1 出土遺物観察表(1) 土器

No.	出上場	種類	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調		参考
			口径	底径	厚さ				外側	内側	
1	I区 風倒木痕A	盤	-	-	-	ハケ	ハケ~工具ナダ	茶褐色微細	ややあまい	淡板	淡板~淡黄褐色
2	I区 II層	盤	-	-	-	工具ナダ	工具ナダ	赤褐色少斑 細胞少	ややあまい	淡板	淡板
3	II区 風倒木痕A	蓋	-	-	-	工具ナダ	工具ナダ	茶褐色少斑 赤褐色少	良	淡黃褐色	淡黃褐色
4	I区 黒岩木痕A	蓋	-	-	-	工具ナダ	工具ナダ	赤褐色少	良	淡黃褐色	淡黃褐色
5	I区 漆油木痕A	蓋	-	-	-	ハケ	工具ナダ	赤褐色微細	ややあまい	淡黃褐色	外側:スヌ少量

表2 出土遺物観察表(2) 輸入陶磁器

No.	出上場	種類	基準	法量(cm)			調整・成形	素胎	胎土色	胎		年代・参考	
				口径	底径	厚さ				外側	内側		
6	I区 III層	青磁	横	-	-	-	-	-	淡灰	淡オリーブ	淡オリーブ	飴糞期	14c後~15c中
7	I区 II層	青磁	直	-	-	-	-	高台	淡灰	淡オリーブ	淡オリーブ	健堀期	14c後~15c中
8	I区 III層	青磁	横	-	-	-	-	-	淡灰	オリーブ灰	オリーブ灰	健堀期	14c後~15c中
9	I区 II層	三脚脚印	直	-	-	-	-	-	青灰	黒褐色	黒褐色	半圓	14c後~15c中
10	I区 風倒	三脚脚印	直	-	-	-	-	-	青灰	黒褐色	黒褐色	半圓	14c後~15c中
11	I区 II層	四脚脚印	可付型	-	-	-	-	横灰~灰褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	半圓	14c後~15c中

風倒木痕AはⅢ層混じりのⅣ・Ⅴ層混じりの層であり、弥生時代終末~古墳時代前期の土器片が92点出土したが、全く接合しない。地層横軸以前は、当該期の土坑であった可能性が高い。

風倒木痕BのIV a・V・VI層混じりの層(V'層)からは、条痕文土器(縦I式)(第15図-66~第16図-72~76)やチャートの剥片等が出土した。土器片の殆どは同一個体と思われる。

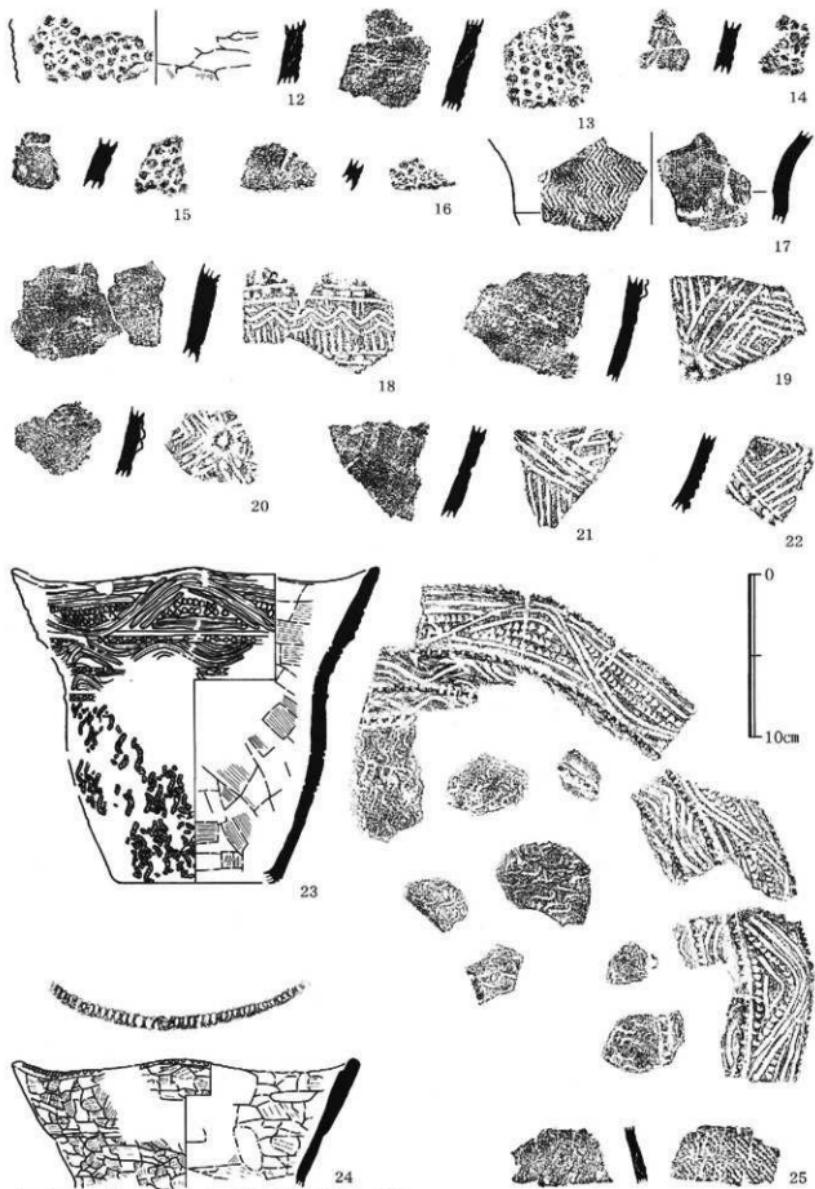
調査の主体であるVI層は、北東頂部から南西方向に浅く凹む谷部に厚く堆積し、Ⅲ区にそのづきが遺存する。遺物は、碟や小碟を殆ど含まないVI a層に多く含み、中でも北西部に集中し、接合する破片も多い。土器片は、I区で150点余、III区で16点出土したが、III区の遺物は接合しない。石器や剥片等はI区で140点余、II区で黒曜石のチップが1点、III区で3点出土し、製品は少ない。

繩文土器の大半は早期に属し、楕円形押型文土器(第13図-12~16)のほか、手向山式土器(17)、刺突のある隆起突起と瘤状突起を貼付し、沈線文を施すもの(19~22)、平柄式土器(23~第14図-30、32・33、35~38)、塞ノ神式土器A類(31)、同B類(34、41)、円筒土器(40)等がある。

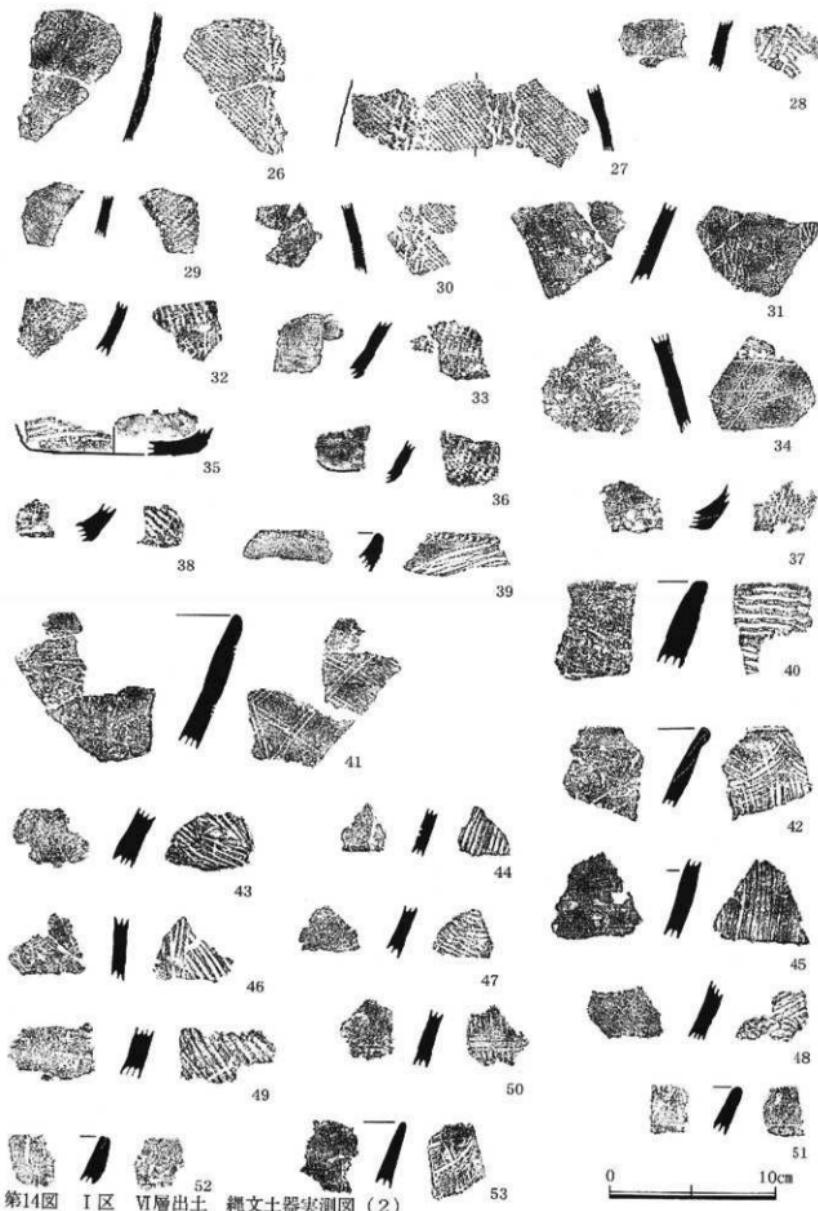
12~16は全て別個体と思われ、19~22は同一個体と思われる。23は、約30点の破片を接合・復元している。24の口縁部は、26~30・32・33・35~39等と同一個体と思われるが、接合には至らない。27は19m離れた破片が接合しており、当該土器が最も広範囲に分散している。

88は唯一の土製品で、土器片を円形に整形し、側面の一部を擦っている。同様の製品は、本市においては後期に盛行するが、早期のものとしては初見となる。

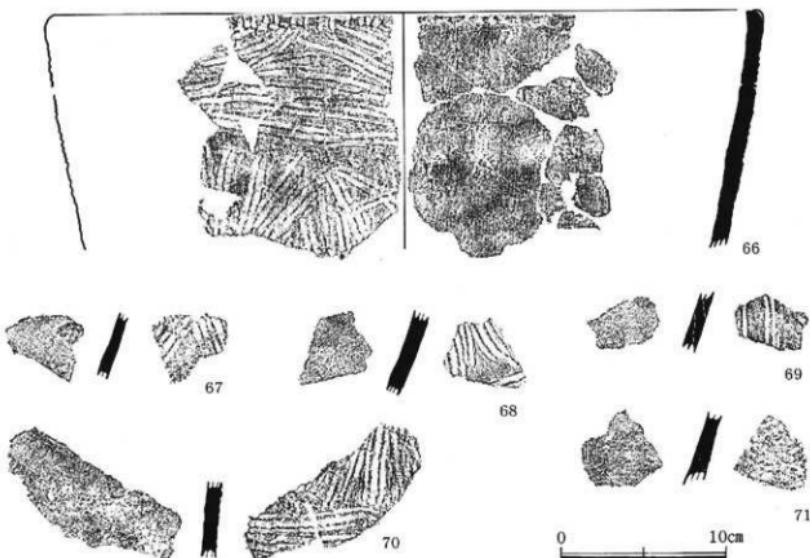
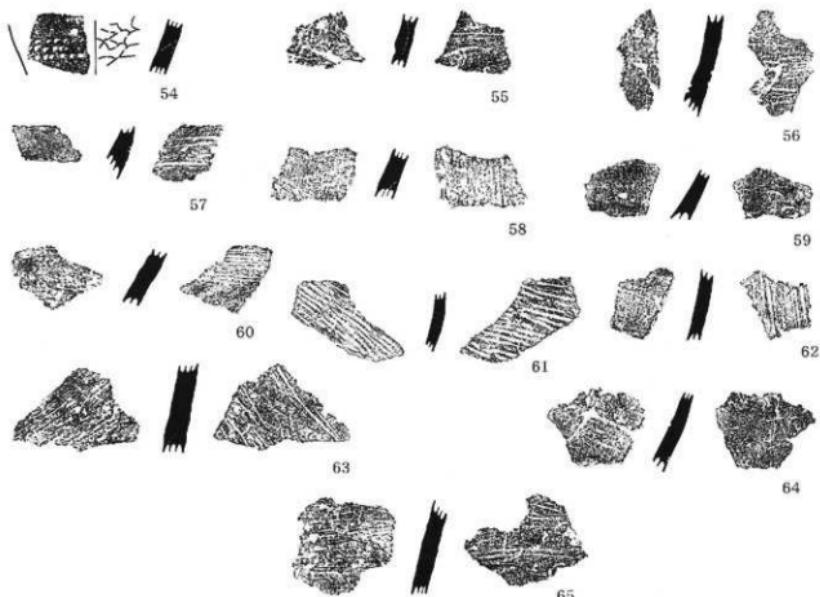
III区のVI層はI区から続いている浅い谷状の落ち込みが若干遺存しており、塞ノ神式土器片10点



第13図 I区 VI層出土 縄文土器実測図 (1)

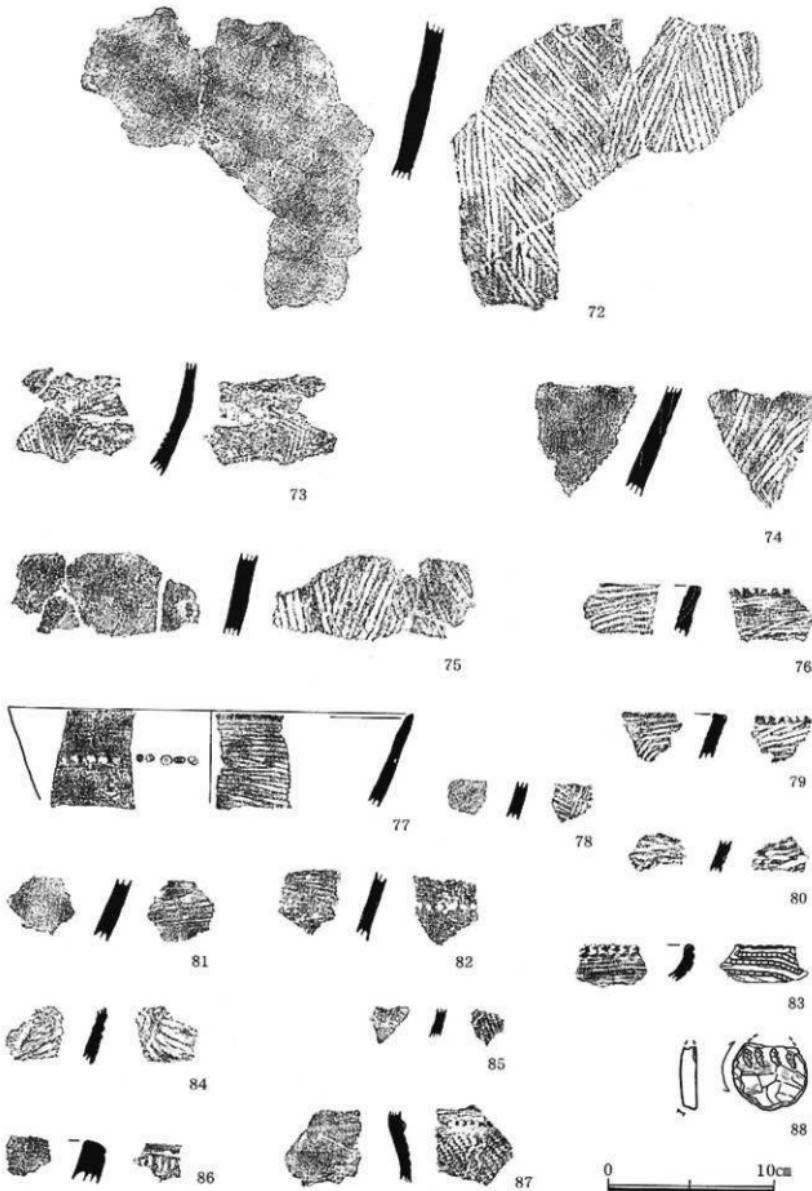


第14図 I区 VI層出土 繩文土器実測図 (2)

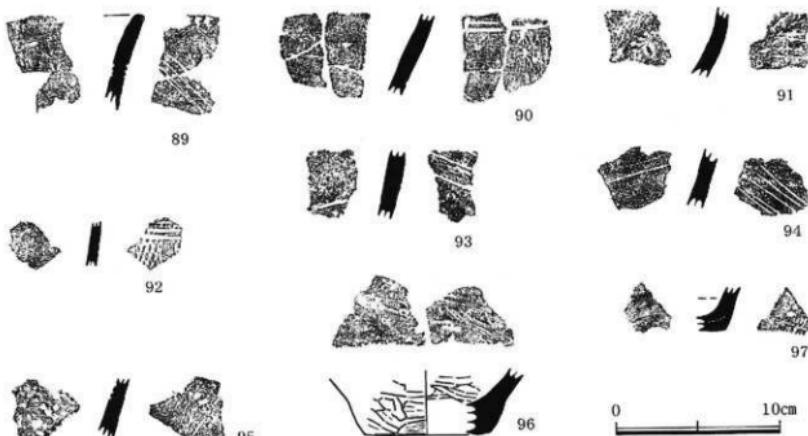


第15図 I区 VI層出土 繩文土器実測図(3)、V'層出土 繩文土器実測図(1)

54-65: V'層



第16図 I区 V'層出土 繩文土器実測図(2)、IV a 層出土・排土採取縄文土器実測図、土製品実測図  
77~85: Naga



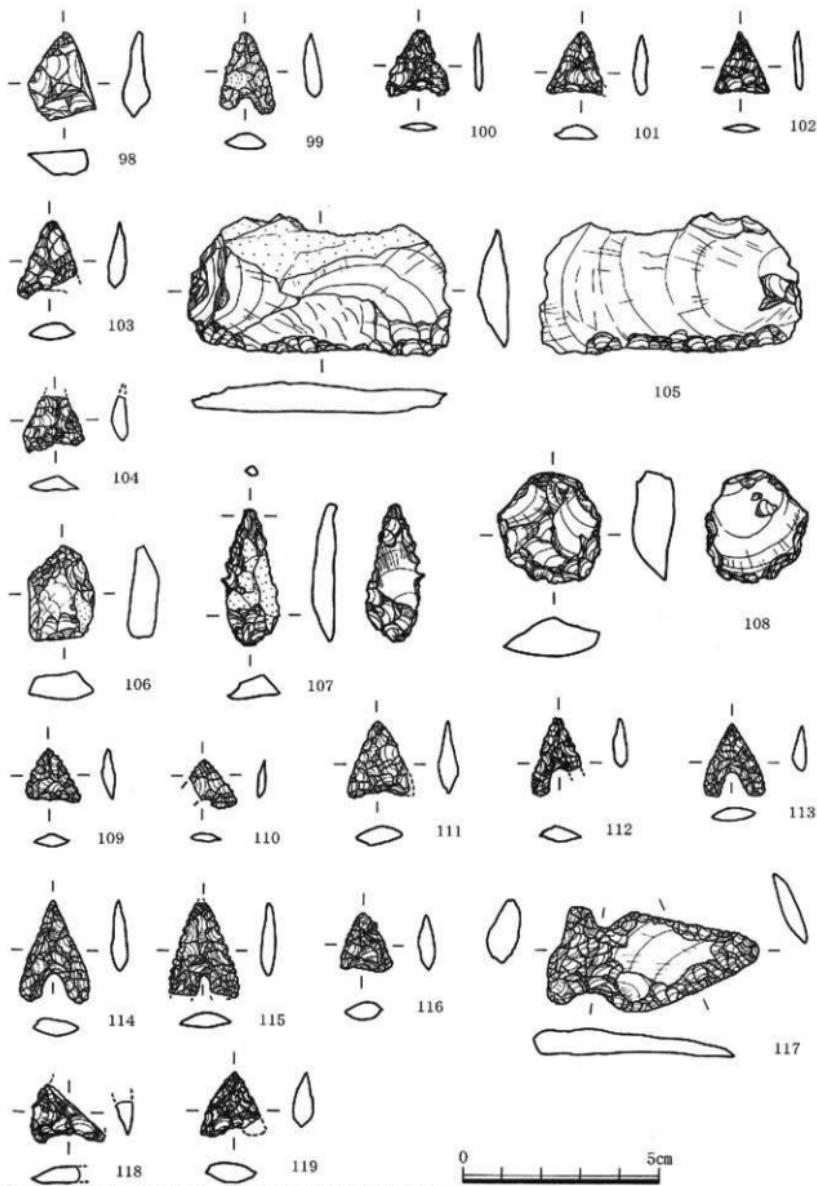
第17図 III区出土 繩文土器実測図

余が出土した。接合した破片は無い。

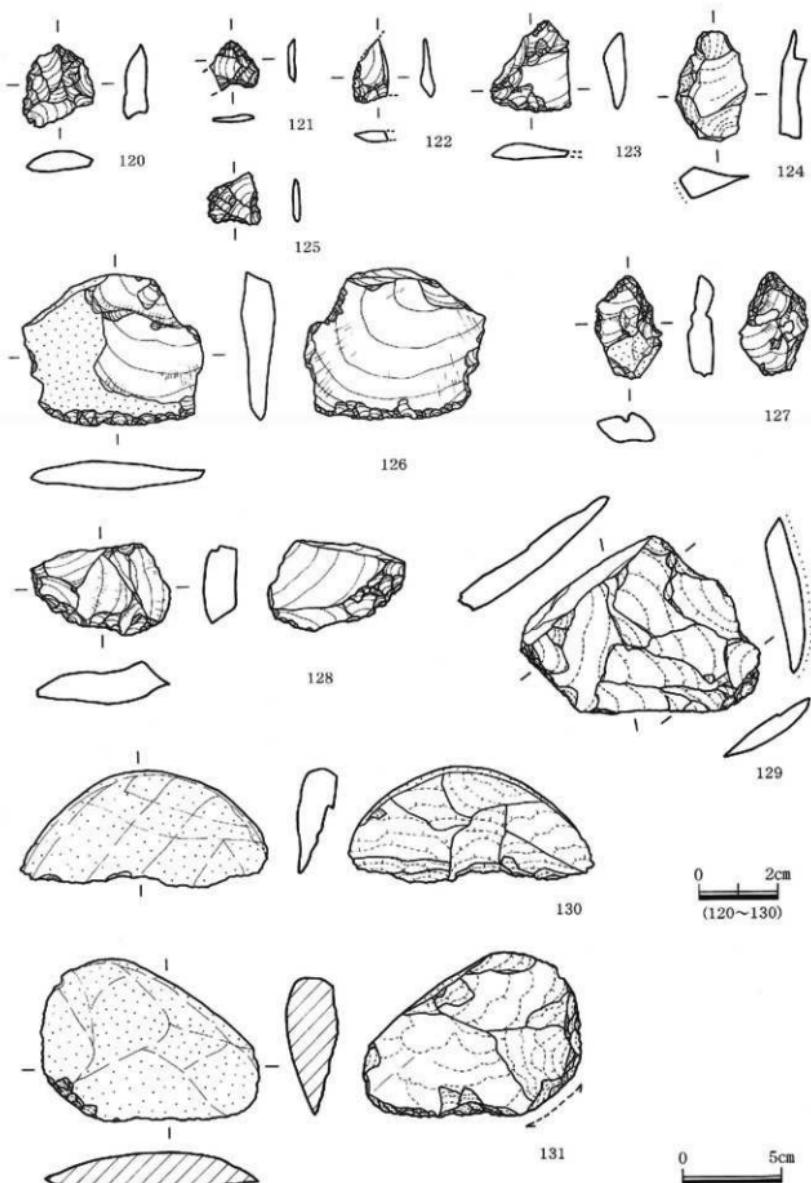
石器は、IV a層から打製石鎌1点（第18図-99）と未製品1点（98）、ほか剥片・チップ少量が出土している。V・V'層からは、打製石鎌が5点と未製品2点、スクレイパー1点のほか、剥片・チップが40点余出土している。VI層においては、打製石鎌が9点と未製品8点のほか、石匙1点、スクレイパー1点、刃器2点、2次加工のある剥片1点、台石の可能性のあるもの1点、石核数点のほか、剥片・チップが100点余出土している。133の石核は、2m離れた2点が接合したもので、廃棄後に破損したものと思われ、一部、欠損している。135の平石の片面（検出面）には、細かい擦痕や平滑面があり、堅果類の粉碎や石斧刃部の粗砾的使用を想定したい。

打製石鎌の殆どは、3～4種類（産地）の黒曜石とチャート（白色・玉髓系のもの、黄緑色～暗青灰色系のもの）が利用され、刃器には粘板岩を、大型刃器と石皿は加久藤溶結安山岩を素材とする。

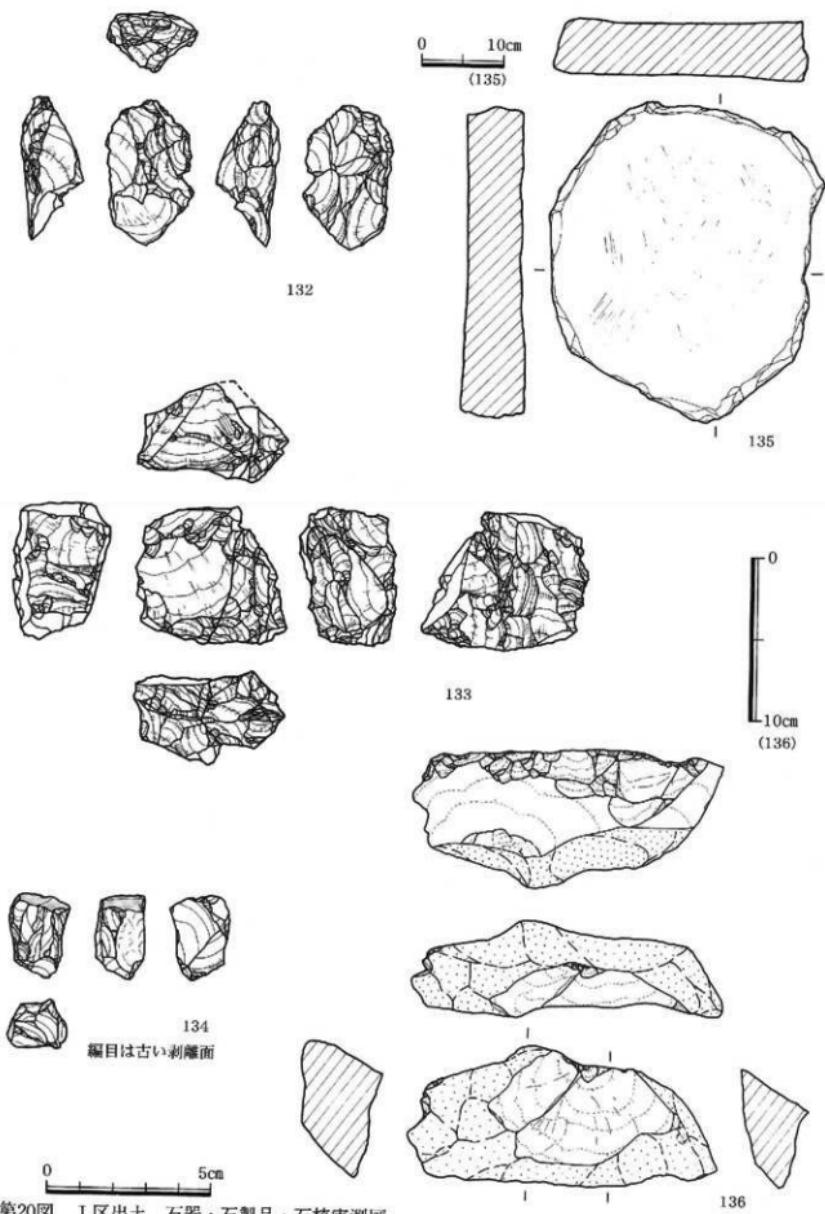
遺跡内においては、加久藤溶結安山岩のみ調達できるが、他の石材は全て持ち込みである。



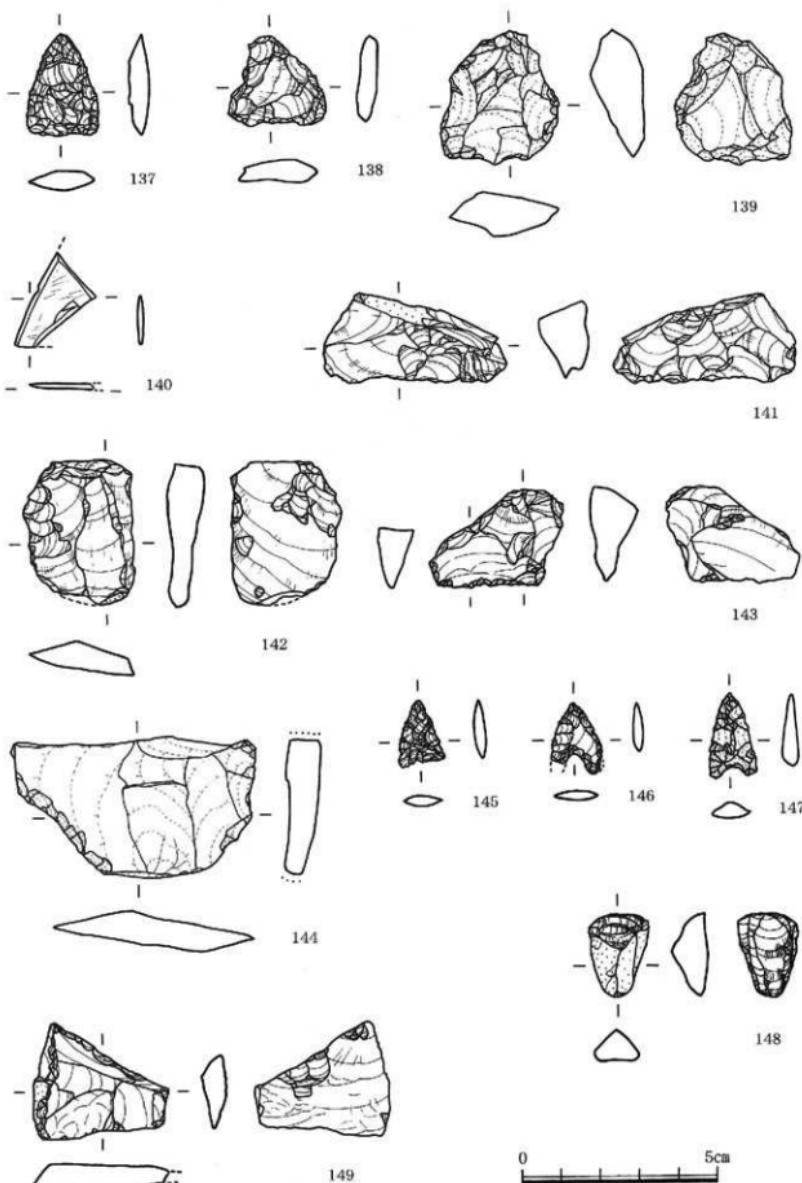
第18図 I区 IV層出土 石器・未製品実測図(1)



第19図 I区 IV層出土 石器・木製品実測図（2）



第20図 I区出土 石器・石製品・石核実測図



第21図 I区IVa・V'層出土石器・未製品・石核・剥片・排土採取石器、III区出土剥片実測図

表3 出土遺物觀察表 (3) 青銅土器 (1)

No	出 土 地	形 態	計 量 (mm)			測 定			地 上	地 底	色 質		備 考
			口徑	底径	厚	外 面	内 面	外 面			外 面	内 面	
23	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	丁草工ナデ	南端少や多い 北端少や多い	良好	純一淡青褐色	淡青褐	褐色	褐色河原灰
13	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	工具ナデ	小端少量	良好	淡青	淡青	淡青	淡青河原灰
14	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	丁草工ナデ	南端少や多い 北端少や多い	良好	淡青	淡青	淡青	河原灰河原灰
15	区 V-12 SS井周辺	深井	-	-	-	ナデ	丁草工ナデ	南端少や多い 北端少や多い	良好	淡青褐色	淡青	淡青	河原灰河原灰
16	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	丁草工ナデ	南端少や多い 北端少や多い	良好	淡青褐色	淡青	淡青	河原灰河原灰
17	区 V-12	深井	-	-	-	山型	工具ナデ	小端少量	良好	淡青褐色～淡褐色	淡青褐色～淡褐色	淡青	山型灰
18	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	ナデ	鐵錆跡少量	良好	淡青褐色～淡褐色	淡青褐色～淡褐色	淡青	スズカ露 河原灰～少量
19	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	ナケズリ	鐵錆跡少量	良好	淡青褐色～淡褐色	淡青褐色～淡褐色	淡青	河原灰～少量
20	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	ナナ	赤褐色少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	淡青褐色～淡褐色	淡青	淡火燒
21	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	工具ナデ	鐵錆跡少量	良好	从二～淡青褐色	鐵錆跡～薄茶褐色	从二	山型灰～淡青褐色
22	区 V-12	深井	-	-	-	ナデ	ナデ	鐵錆跡少量	良好	淡青褐色	淡青灰	淡青	山型灰～淡青褐色
23	区 V-12	深井	23	105	194	工具ナデ	山工工ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	暗褐色～朱色	暗褐色～朱色	暗褐色	淡青褐色～淡褐色
24	区 V-12	深井	21	-	-	工具ナデ	工具ナデ	鐵錆跡少量	良好	系灰～淡青褐色	系灰～淡青褐色	系灰	山型～井
25	区 V-12	深井	-	-	-	工具ナデ～ナナ	工具ナデ～ナナ	鐵錆跡少量	良好	暗褐色～淡青褐色	暗褐色～淡青褐色	暗褐色	外山～淡青褐色
26	区 V-12	深井	-	-	-	工具ナデ～ナナ	工具ナデ～ナナ	鐵錆跡少量	良好	系灰～淡青褐色	系灰～淡青褐色	系灰	外山～淡青褐色
27	区 V-12	深井	-	-	-	工具ナデ～ナナ	工具ナデ～ナナ	鐵錆跡少量	良好	暗褐色～淡青褐色	暗褐色～淡青褐色	暗褐色	山型～井
28	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	ナナ	鐵錆跡少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	淡青褐色～淡褐色	淡青	河原灰～少量
29	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少量	良好	淡青褐色～淡褐色	淡青褐色～淡褐色	淡青	山型～井
30	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少量	良好	系灰～淡褐色	暗褐色～暗褐色	暗褐色	井～井
31	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ～ナナ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	ややあまい	淡青褐色～淡青褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
32	区 V-12	深井	-	-	-	近畿	工具ナデ	鐵錆跡少量	良好	淡青褐色	暗褐色～淡褐色	淡青	井～井
33	区 V-12	深井	-	-	-	開文	ナナ	鐵錆跡少量	良好	淡青	淡青灰	淡青	井～井
34	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	淡青褐色～淡褐色	淡青	河原灰～少量
35	区 V-12	深井	-	103	-	ナナ	ナナ～工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少量	良好	淡青灰	淡青灰	淡青	井～井
36	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	ナナ	鐵錆跡少量	良好	淡青	淡青	淡青	井～井
37	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	丁草ナデ	鐵錆跡少量や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色	暗褐色	井～井
38	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡微量	良好	淡青灰～淡青褐色	淡青灰～淡青褐色	淡青	井～井
39	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ～ナナ	鐵錆跡少量	良好	暗褐色	暗褐色	暗褐色	井～井
40	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	ナナ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	暗褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
41	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
42	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
43	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	ナナ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
44	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少量	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
45	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	淡青	井～井
46	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
47	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
48	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
49	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	暗褐色～暗褐色	暗褐色～暗褐色	暗褐色	井～井
50	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	淡青	井～井
51	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	ナナ	鐵錆跡少量	良好	暗褐色	暗褐色	暗褐色	井～井
52	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
53	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～暗褐色	暗褐色	井～井
54	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	丁草工ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～淡褐色	暗褐色	井～井
55	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色	淡青	淡青	井～井
56	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色	淡青	淡青	井～井
57	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	系灰～暗	暗褐色	暗褐色	井～井
58	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～暗褐色	暗褐色	井～井
59	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色～淡褐色	暗褐色～暗褐色	暗褐色	井～井
60	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	暗褐色	暗褐色	暗褐色	井～井
61	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色	淡青	淡青	井～井
62	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	工具ナデ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色	淡青	淡青	井～井
63	区 V-12	深井	-	-	-	ナナ	ナケズリ	鐵錆跡少や多い 朱色少や多い	良好	淡青褐色	淡青	淡青	井～井

表4 出土遺物觀察表 (4) 積木土器 (2)

No	出土地	器種	量 (m)				形	土	焼成	量		備考
			上	中	下	外	内	面	面	外	内	
54	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	L型ナメ	丸底ナメ	良好	褐色	褐色	褐色灰-茶色
55	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	紅土莫ナメ	半干式	良好	褐色	褐色	褐色灰-淡黃褐色
66	II区 正側木根B	圓錐	424	-	-	-	丁字工ナメ	河原砂少や多い	良好	淡褐色	淡褐色	外壁:スズ西面 内面:オコゲ少見
67	II区 正側木根D	圓錐	-	-	-	-	朱漆	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	褐色	褐色灰-灰褐色
68	I区 正側木根C	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
69	I区 正側木根D	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
70	I区 正側木根E	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
71	II区 正側木根B	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
72	1st 正側木根B	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
73	II区 正側木根C	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
74	II区 正側木根D	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
75	I区 正側木根E	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
76	II区 正側木根G	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
77	I区 正側木根H	圓錐	246	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
78	II区 正側木根I	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
79	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
80	I区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
81	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
82	I区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
83	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良	淡褐色	褐色灰-灰褐色
84	I区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
85	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
86	I区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
87	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
88	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
89	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
90	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
91	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
92	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
93	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
94	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
95	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
96	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色
97	II区 V層	圓錐	-	-	-	-	赤鐵	丁字工ナメ	粗面砂少や多い	良好	淡褐色	褐色灰-灰褐色

表5 出土遺物觀察表 (5) 土製品

No	出土地	器種	量 (m)				形	土	焼成	量		備考
			上	中	下	外				外	内	
98	II区 V層	土製片切丁子器	45	10	ナメ	ナメ	微面砂少や多い	良	淡褐色	淡褐色	淡褐色	外壁:スズ少見 内面:オコゲ少見

表6 出土遺物觀察表 (6) 石器・石製品 (1)

No	出土地	器種	量 (m)				形	土	焼成	量		備考
			上	中	下	外				外	内	
98	II区 V層	石器未製品	22	17	6	2	チャート	石器	20	(15)	4	-
99	II区 V層	石器	25	13	4	1	安山岩	石器	19	16	3	-
100	II区 V層	石器	27	16	5	1	黑曜石	石器	26	17	5	1
101	II区 正側木根B	石器	16	G0	3	-	黑曜石	石器	15	12	4	-
102	II区 正側木根C	石器	16	14	2	-	黑曜石	石器	15	12	4	-
103	II区 V層	石器	20	0.6	4	1	チャート	石器	53	25	6	9
104	II区 V層	石器	15	15	3	-	黑曜石	石器	18	(16)	4	1
105	II区 V層	スレーブ	36	67	8	21	チャート	石器	77	(15)	5	1
106	II区 V層	石器未製品	24	16	9	3	黒曜石	石器未製品	22	18	5	2
107	II区 V層	石器未製品	35	15	6	2	ハマガリ山岩	石器未製品	12	12	1	-
108	II区 V層	2次加工(心形)	29	26	10	8	チャート	石器未製品	12	(9)	3	-
109	II区 V層	石器	14	15	3	-	黒曜石	石器未製品	12	11	5	2
110	II区 V層	石器	13	12	2	-	黒曜石	石器未製品	24	18	4	3
111	II区 V層	石器	19	0.9	5	1	チャート	石器未製品	12	12	1	-

表7 出土遺物観察表(7) 石器・石製品(2)

No	出土地	器種	法面(m)			石材	No	出土地	器種	法面(m)			石材		
			表5	幅	厚さ					表5	幅	厚さ			
125	I区 VI層	石器大製品	13	14	2	-	チャート	127	II区 II層	石器	26	18	3	2	チャート
126	II区 VI層	スクリバー	39	45	8	15	チャート	128	II区 III層	石器大製品	22	25	4	3	黒曜石
127	II区 VI層	石器未製品	26	17	7	3	黒曜石	129	II区 II層	石器未製品	34	29	13	12	ハリ賀山白岩
128	II区 VI層	2次加工のある削片	23	36	8	9	チャート	140	II区 II層	磨製石器	(24)(21)	1	1	-	桔梗岩
129	II区 VI層	刀形	45	50	6	19	花崗岩	141	II区 III層	石核	23	46	11	13	チャート
130	II区 VI層	刀形	29	62	9	6	花崗岩	142	II区 III層	刃片	37	28	9	11	黒曜石
131	II区 VI層	刀形	84	110	27	254	砂岩	143	II区 VI層	焼削前のある削片	25	34	12	8	チャート
132	II区 VI層	石核	44	26	6~18	27	チャート	144	II区 III層	2次加工のある削片	36	62	8	24	安山岩
133	II区 VI層	石核	42	46	27	55	黒曜石	145	II区 地上	石核	17	12	3	-	黒曜石
134	II区 VI層	石核	26	18	14	7	チャート	146	II区 地上	石器	38	(13)	2	-	チャート
135	II区 VI層	石核?	394	334	78	36,000	加久傳 湯島吉山蔵 加入集落研究会 山野(著者)	147	II区 地上	石核	22	12	4	-	ハリ賀山白岩
136	II区風化木根付	万形	86	189	47	730		148	II区 地上	石核	21	15	9	3	黒曜石
								149	III区 VI層	使用済のある削片	30	35	6	7	チャート

## 第6節 まとめ

瘦せ尾根の斜面で土石流も伴う悪条件にもかかわらず、縄文時代早期後半の集石遺構4基と土坑1基を検出した。

縄文土器は、僅かな個体数であるが、押型文土器、手向山式土器、平柄式土器、塞ノ神式土器、轟I式土器が継続的に出土した。遺構の構築年代は、平柄式期を主とする極く短期間を想定している。被熱礫や遺物はほぼ全面に散在し、石器製作址等の存在は特定できない。石器や剥片・チップを生み出した敲き石や、生業に大きく関与する石斧は1点も出土せず、長期にわたる居住は無かったと言える。

III区の西壁断面の観察では、客土下に重機の爪跡が残っており、VIa層まで削平されていること、IVb・V層は畦畔内的一部にのみ遺存していることなどが確認できた。

縄文時代中期以降弥生時代後期までと、古墳時代中期から中世初期まで、中世末から幕末までは断絶があり、今日に至る。各時期の集落本体は、現在の民家が点在する傾斜地鞍部に包囲していると推定される。

なお、I区西壁北端において火山灰分析をした結果、旧石器時代から縄文時代早期にかけて幾度かの土石流があり、当地の地形が形成されたことが判明した。

# 付 篇

## 古屋敷遺跡出土の墨書き土器

宮崎産業経営大学

柴田博子

### はじめに

宮崎県えびの市大字東川北に所在する古屋敷遺跡は、古代以降では9世紀から15世紀頃まで継続した遺跡であり、最盛期は鎌倉時代とみられている。この遺跡からほぼ完形の5点と、小破片であるため判読不能な9点の墨書き土器が出土した。13点は土師器、1点が内黒土師器で、いずれもおおむね9世紀後半ととらえられている。以下ではほぼ完形の墨書き土器を中心に検討したい。

### …「鷹」墨書き土器（報告書番号682）

#### 1. 出土状況と墨書き

この土器は、2間×推定4間に北隅をもつ掘立柱建物（SB-85）の、隅部分の西から2番目の柱穴の底に近い部分から出土した、土師器塊である。体部外面に数箇所の墨書きがある。上半の3文字はいずれも正位の記載で、左の2文字は「鷹」であり、欠損部をはさんで右端も「鷹」字のややくずれたものであろう。欠損部周辺にも墨痕があり、恐らく「鷹」字が並んで書かれていたものと考えられる。下半は判読できないが、1文字ないし2文字を書いたようである。

#### 2. 「鷹」墨書き土器の事例

「鷹」字が土器に墨書きされていた例には、以下のようなものがある。

- (a) 奈良県平城宮跡259次調査（造酒司南辺・宮内道路）道路側溝出土、土師器塊・底部内面へ墨書き、8世紀末～9世紀初頭、「□〔麻カ〕」
- (b) 同出土、須恵器塊・底部外面へ墨書き、8世紀末～9世紀初頭、「□〔麻カ〕」
- (c) 奈良県平城京左京三条二坊九坪（長屋王邸東隣）溝出土、須恵器皿（転用鏡）・底部外面へ墨書き、8世紀、「□／始／始始／女／衣／鷹／□〔麻カ〕」
- (d) 奈良県大安寺旧境内、杉山古墳周濠出土、土師器皿・底部外面へ墨書き、8世紀末～9世紀初頭、「鷹□／□〔麻カ〕」
- (e) 秋田県秋田城24次調査（外郭南辺部）出土、赤褐色土器塊・底部外面へ墨書き、「鷹」
- (f) 山梨県笛吹市狐原遺跡、4号竪穴住居出土、土師器塊・底部外面へ墨書き、9世紀、「鷹」
- (g) 同遺跡、遺構外出土、土師器皿・底部外面へ墨書き、9世紀、「□〔麻カ〕」(1)

出土地は、集落遺跡の例もあるが都城や官衙周辺が目立つ。その背景には、奈良・平安時代における養鷹・鷹狩が王權と深く関わるものであったことが想定される。

#### 3. 古代の養鷹

日本列島では、たとえば6世紀の群馬県オクマン山古墳で鷹匠の埴輪が出土していることなどから、遅くとも古墳時代には鷹狩を行っていたことが知られる。その起源を物語る『日本書紀』仁徳

天皇43年9月庚子条には、百濟王の一族である酒君が鷹を調習し、その鷹で天皇が狩りをしたとあり、百濟伝米の技術とみなされていた。そして701年の大宝律令以降、軍政一般を管轄した兵部省の下に主鷹司が設けられ、狩猟用の鷹・犬の調習をつかさどり、鷹養戸17戸が大和・河内・摂津国におかれていった(2)。この中央政府の主鷹司は、殺生禁断の趣旨から8世紀代にたびたび停止されたが、9世紀には鷹飼10人と犬が天皇直属機関である藏人所におかれることになった(3)。

これら朝廷の鷹は「五畿七道諸國年貢御鷹」とあるように(4)、諸国からの毎年の貢上によって集められたものであった。天平10年(738)『筑後國正税帳』には、「貢上鷹養人參拾人」と「貢上大壹拾伍頭」の、6月1日から9月29日までの147日間の食糧が計上されている。しかも同年の『周防國正税帳』の10月4日に、大宰府から京に向かう「進上御鷹部領使」として筑後國の介と従者、そして「持鷹二十人」と「御犬壹拾頭」が周防國を通過した際の食糧が計上されており、筑後國で調習された鷹・犬から選ばれて大宰府進上の「御鷹」となったことが分かる。これについて弓野正武氏は「時期的には五月頃に巢下しされた鷹子が（筑後）国衙に集められ、狩の季節を迎える前に調習が終って、長期の運搬にも耐えられるよう仕上げられ、「鷹養人三十人」は鷹の調習にあたった人物、「持鷹二十人」は1人が鷹1羽を携えていたものとみなされる(5)。なお「鷹養人」の食糧「人別二把」は、多祢島人や防人の4把より少なく、俘囚と同じであることから、彼らの身分の低さが推察されている(6)。このように奈良時代から国で鷹を飼育・調習して朝廷に貢上するという体制が確認できる。天祐元年(970)に成立した『口遊』には、「八月十六日甲斐國、八月十二日信乃、八月十三日下野國、八月廿五日陸奥、八月廿九日出羽國、九月十日能登、九月十日越後國、九月十三日安芸國、九月廿四日大宰府、〈謂之貢鷹期〉」とあり、10世紀後半にも毎年の貢上が大宰府からあるべきとされていた。なお弓野氏は、伊賀国で所領四至を示した文書の内訳に「鷹巣」が掲げられている事例から、「国衙には国内各地の鷹巣を掌握し、鷹栖を保護し、鷹子を集める体制をつくって、鷹養人を置いていたであろう」と指摘している(7)。

国が鷹を飼育していたのであるから、各国において国司自身が養鷹・鷹狩を行うこともあった。『万葉集』卷17には、天平20年(748)越中守であった大伴家持が越中国射水郡にて獲た鷹に大黒と名づけ、よく雉をとる鷹であったのに、逸したことなどを詠んだ長歌と短歌が収載されている。また延暦18年(799)、尾張国海部郡主政の刑部権佐の告発によると、尾張国の権源である阿保広成がほしいままに鷹・鶴を養い、海部郡少領尾張宮守に獵をさせていたという(8)。

鷹狩は、弓矢で鹿や猪を狩りするのとは違って、支配者の遊獵であり、国司であっても天皇の許可が必要とされていた。神亀5年(728)聖武天皇は、思うところがあるので養鷹をやめるが「天下の人もまた養うことなれ」と禁じて後の勅を待つように詔し(9)、宝亀4年(773)光仁天皇は京畿内七道諸国に対して「鷹を養うことは先に既に禁斷」してきたが、京畿諸国の郡司百姓および王臣子弟が、特別の許可を得たと詐称し、あるいは勢力ある侍臣の威を借りて、鷹を養い鷹狩していることを指摘し、重ねて厳禁する勅を出している。許可される者は、大同3年(808)に親王・觀察使以上・六衛府次官以上と示され、太政官から公驗が支給されることになっていた(10)。

9世紀に入っても禁令は繰り返し出されており、貞觀元年（859）に畿内・畿外諸国司が鷹・鶴を養うことを禁じ<sup>(11)</sup>、貞觀8年（866）にも「五畿七道諸国司庶人」に、ほしいままに鷹・鶴を養うことを禁じている<sup>(12)</sup>。これらの度重なる発令からすると、9世紀代、国司クラスの官人層が無許可でしばしば養鷹・鷹狩を行っていたことが容易に察せられる。

長久年間（1040–1044）に成立したとされる『法華駿記』第113話には、鷹を取って陳奥國へ獻上し、その価値を得ることで生計をたてていた男の説話が見える。また天暦2年（948）出羽守から閑白太政大臣藤原忠平のもとへ送られていた若鷹を、忠平は朱雀上皇へ獻じており<sup>(13)</sup>、10世紀半ばには贈答品となっていた。このように国司（受領）を通じて鷹を入手するルートとともに、中央貴族がみずから使者を遣わして直接求めることもあった。延喜7年（907）に成立した『藤原保則伝』には、元慶3年（879）保則が山羽守となった頃、「權門子、年來求善馬・良鷹」むこと、愚朴の民はこれを告發せずただ要求に従っていると叙述されている。

#### 4. 南九州の養鷹

古代日向国における養鷹の記録は残されていないものの、弓野氏は前述した天平10年の鷹について「必ずしも筑後国内のみから徵収されたと考える必要もなく、大宰府管内諸国で巣下しされた鷹子が、京進に際して筑後国に集められ、同時に調習されたとみるべきであろう」と述べられる<sup>(14)</sup>。

日向国ではないが、天平8年（736）の『薩麻国正税帳』には阿多郡少領に「薩麻君鷹」という人名がみえる。また『和名抄』には大隅国肝属郡と薩摩国阿多郡にそれぞれ「鷹屋郷」があることから、「鷹屋」は鷹を飼育する小屋を意味するとし、両国には「官有の「鷹屋」が置かれた」とみなされ、さらに鷹狩には火を伴うが、『新撰姓氏録』右京神別下に「阿多御手犬養」氏がみえることなどから、「律令国家体制成立以前に鷹・狗・鷦・鷯・猪は、大隅・薩摩の华人、肥前・肥後・日向の肥人等によって飼養されていた」と、7世紀にさかのぼって養鷹と南九州との関連を指摘する秋吉正博氏の見解もある<sup>(15)</sup>。

そもそも中央アジアの騎馬民族にはじまると目される鷹狩りは<sup>(16)</sup>、少なくとも技術導入の初期には畜産技術との関係が想定されよう。日向国は、7世紀初めに「馬ならば日向の駒」と歌われ<sup>(17)</sup>、『延喜式』（兵部省）での馬牛牧の数は肥前国と並んで全国一であった。『口遊』にもみえる大宰府からの年貢の背景には、日向国においても、国衙が鷹巣を掌握し鷹子を集める体制を有し、また「鷹養人」や鷹を取る人がおり、さらには国司あるいは大宰府などの有力官人が私的に養鷹・鷹狩したり、貴族から鷹を求めることがあったと想像される。「鷹」墨書き土器の事例数は、今後の発掘調査と集成の進展により増加するであろうが、これまで管見に入った集落遺跡出土例<sup>(18)</sup>が甲斐國であることは、貢鷹國であり、同時に貢馬國でもあって、興味深い。

古墳敷遺跡では綠釉陶器や越州窯青磁も出土していることからも、一般的な集落というよりは、小規模であるが有力者の宅と考えられる。「鷹」墨書き土器からは養鷹などとも関わった、国司や大宰府官人に仕える者、あるいは『藤原保則伝』にみえるような中央貴族に仕える者などが、可能性として想定できるように思われる。

## 二. SK-378出土墨書き土器（報告書番号2570～2575）

### 1. 出土状況と墨書き

長さ約1m・幅約50cm・検出面からの深さが15cmの土壙（SK-378）の西端で、口縁部を合わせた形で3組6点の土器が出土し、そのうち2組4点に墨書きがみられる。

まず2571・2574の組は、蓋に転用されている高台のついた土師器皿の体部外面に、「ω」あるいは「3」のような墨書きがある。筆記の向きは明らかでなく、漢字のくずれたものとすれば倒位の「山」の可能性がある。身の土師器塊の体部外面にも薄く墨書きが残るが判読できない。あるいは蓋と同じ墨書きだったのかもしれない。また2572・2575の組は、蓋に転用されている土師器塊の体部外面に「Ω」のような墨書きがある。2571と類似の文字あるいは記号であり、倒位の「山」の可能性がある。身の内黒土器塊は体部外面に正位で墨書きがある。「佛」のつもりかと思われるが、「伴」の可能性もある。いずれも稚拙な筆記であり、文字に熟練した人物によるものとは思われない。

これら3組の土器内には土が流れ込んでいただけで、肉眼で見える遺物は残っていないかったが、何らかの有機物が入っていた可能性はある。土壙西端の掘り形に接していた2570・2573の1組を除いて、他の2組4点は床面より浮いた状態であったことから、これらは、土壙墓を蓋していた木の板の上に置かれていたか、木棺墓の上に置かれていたなどの可能性が想定される。なお遺構の規模から、被葬者は幼児か小児と考えられている。

### 2. 合わせ口にされた供献墨書き土器の事例

墓への供献土器に墨書きがなされている事例、また口縁部を合わせた形で墨書きした壺・塊を埋納した事例は、宮崎県内では本例が初めてである。後者の例には地鎮や陰陽道祭祀と考えられるものがあり、それらについては近年、鹿児島市横井竹ノ山遺跡出土の墨書き土師器から検討が加えられている<sup>18</sup>。一方、埋葬儀礼にともなって口縁部を合わせた墨書き土器を供献しているものとしては、たとえば鹿児島県内に以下の事例がある。

(h) 鹿児島市谷山弓場城跡出土。遺構は長径93cm・短径83cm・深さ33cmの楕円形の土壙で、中央に須恵器壺を立て、その蓋には高台部分を欠損した土師器皿を用い、東側に口縁部を合わせた形で1組2個体の底面ヘラ切り仕上げの土師器塊が置かれていた。蓋に転用された皿を含め3個体とも、体部外面に正位で、「大吉」と推定される墨書きがある。9～10世紀のものである<sup>19</sup>。

(i) 吉田町牧遺跡出土。遺構は長径100cm・短径80cm・深さ60cmの楕円形の土壙で、内部には木炭片を混えた黒色の土が詰まっていた。中央に須恵器壺が置かれ、蓋には土師器壺が転用されている。壺の周辺に、身と蓋の対になって6組12個体の土師器塊が配置されていたようである。このうち身として用いられた4個体の体部外面に「大」の墨書きが、1個体にも確かではないが「祀」のようにもみえる墨書きがなされているとのことである。9世紀のものである<sup>20</sup>。

これら2例は骨蔵器にともなう供献であった。このほか、合わせ口ではないが、金峰町白樺野遺跡では骨蔵器埋納土壙の四隅に「山」と墨書きされた土師器壺が正位で置かれていた<sup>21</sup>。また墨書きは無いが、えびの市役所田遺跡では、土師器の壺と皿が口縁部を合わせた形で骨蔵器そのものとして

用いられた例がある<sup>22)</sup>。熊本市黒髪町遺跡群第2次調査区で確認された9世紀代の土壙墓1基の内部には土師器塊5点と須恵器塊1点が供獻されていたが、この墓に近接する小穴2基にはそれぞれ土師器塊2点が合わせ口にして埋納され、同じ調査区内には底部外面に墨書が認められる須恵器塊1点を埋納した小穴1基が確認されている<sup>23)</sup>。熊本県宇土市の山平遺跡でも、土壙墓の東端に、墨書はないが、11世紀前半代の内墨塊2個が口を合わせた形で出土しているとのことである<sup>24)</sup>。

これらの具体例をみると、墓に供獻された土器には、合わせ口にする場合とそうでない場合、墨書をする場合としない場合の、さまざまな組み合わせがある。そのなかで合わせ口にすることと墨書することにどのような積極的な意味が見い出せるのか、残念ながらまだ定見がない。

SK-378出土墨書土器は読みが困難であるが、「ω」を「山」とすれば文字は白樺野遺跡と共通してこよう。また土器を合わせ口にすることに『宇治拾遺物語』にみえるような陰陽道の祭祀を認める材料は、上に紹介した墓に関してはみあたらぬ。(b)(i)の例からしても、埋葬儀礼の執行には、むしろ下級の僧を想定するほうが自然であろう<sup>25)</sup>。古屋敷遺跡の墓は火葬墓ではないが、もうひとつの墨書はやはり「佛」のつもりで書かれたものと考えておきたい。

#### おわりに

これまでに紹介したもののはか、古屋敷遺跡では墨書の部分的に残る土師器が9点出土している。1191は「形」「刑」の偏あるいは「型」の上部の可能性などが考えられるが、確定はできない。2118は、うかんむりが正位で筆記されていると思われるものの、文字は不明である。このほかは、文字か筆蹟らしか、記号であるかも判断が困難な状況である。いずれも流れ込みや遺物包含層からの出土であった。

古屋敷遺跡では、土器への墨書行為は9世紀後半期に限られ、その後は行われなくなるようである。これは同じく川内川右岸に所在し9世紀後半期の多量の墨書土器を出土した昌明寺遺跡の動向と類似している。「鷹」墨書は習書のようでもあり、養鷹・鷹狩と関わりのある有力者の存在がうかがえる。一方、土壙墓の供獻土器への記入はきわめて稚拙な筆遣いであり、文字を正確に筆記することのできないような仏教関係者の姿が垣間見える。なお、底部外面への記入は1点にとどまり、13点が体部外面へ記入されている。「鷹」や「佛」かと思われる文字をはじめ、1191や2118も正位の記入であり、「ω」を「山」字とすれば倒位の記入であるが、後者は蓋に転用しており、各々の使用の向きに合わせて筆記された可能性も想像される。

#### 注

- (1) 吉村武彦「出土文字資料データベース」(2002年)を検索した結果である。(a)(b)は奈良文化財研究所『奈良文化財研究所史料第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ』(2003年)、(c)(d)は奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査センター資料No.3 平城京跡出土墨書土器資料 I (第一分冊)』(2002年)、(e)は秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所『秋田城跡発掘調査事務所研究紀要

- I 秋田城出土文字資料集』(1984年)、(f)(g)は山梨県「墨書・刻書土器 漆紙文書」(『山梨県史 資料編3』2001年)による。
- (2)『令集解』職員令主鷹司条古記釈説所引別記
- (3)『日本三代実録』元慶7年7月5日条
- (4)『日本三代実録』貞觀元年8月8日条
- (5)弓野正武「古代養鷹史の一側面」(竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『律令制と古代社会』東京堂出版、1984年)136~7頁
- (6)井上辰雄『正税帳の研究』(精書房、1967年)238頁
- (7)弓野前掲注(5)論文、142頁
- (8)『日本後紀』延暦18年5月己巳条
- (9)『統日本紀』神龜5年8月甲午条
- (10)『政事要略』(巻70糸彈雜事)大同3年9月23日太政官符
- (11)『日本三代実録』貞觀元年8月13日条
- (12)『日本三代実録』貞觀8年10月20日条
- (13)『貞信公記抄』天暦2年7月3日条
- (14)弓野前掲注(5)論文、137頁
- (15)秋吉正博『日本古代養鷹史の研究』(思文閣出版、2004年)54頁、102頁
- (16)橋口尚武「鷹狩り」(大塚初重ほか編『考古学による日本歴史』12、雄山閣出版、1998年)179頁
- (17)『日本書紀』推古天皇20年正月丁亥条
- (18)永山修一「鹿児島市横井竹ノ山遺跡出土の墨書土器について」(『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書07横井竹ノ山遺跡』2004年)
- (19)鹿児島市教育委員会『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)谷山弓場城跡 上巻』(1992年)および出口浩氏の御教示による。
- (20)河口貞徳「吉田町の遺跡」(『吉田町郷土誌』1991年)
- (21)宮下貴浩「白樺野古代火葬墓と製鉄遺物」(『鹿児島考古』34号、2000年)
- (22)役所田遺跡SK-23内出土: (えびの市教育委員会「役所田遺跡」「えびの市埋蔵文化財調査報告書第32集 長江浦地区遺跡群」2002年)
- (23)熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』5号(2003年)
- (24)宇土市史編纂委員会『新宇土市史 資料編2』(2002年)
- (25)池畠耕一氏は、鹿児島県内における文字の展開に、仏教文化との関連を指摘されている(『南端の文字文化』『九州歴史大学講座』6巻7号、1996年)

# 宮崎県えびの市、東川北地区における火山灰分析

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

九州地方宮崎県域に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壤の中には、姶良、鬼界、霧島、桜島、阿蘇など多くの火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層が認められた北岡松地区調査区西壁の北地点および南地点においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、火山ガラス比分析と屈折率測定を行って、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。

## 2. 土層の層序

### (1) 調査区西壁北地点

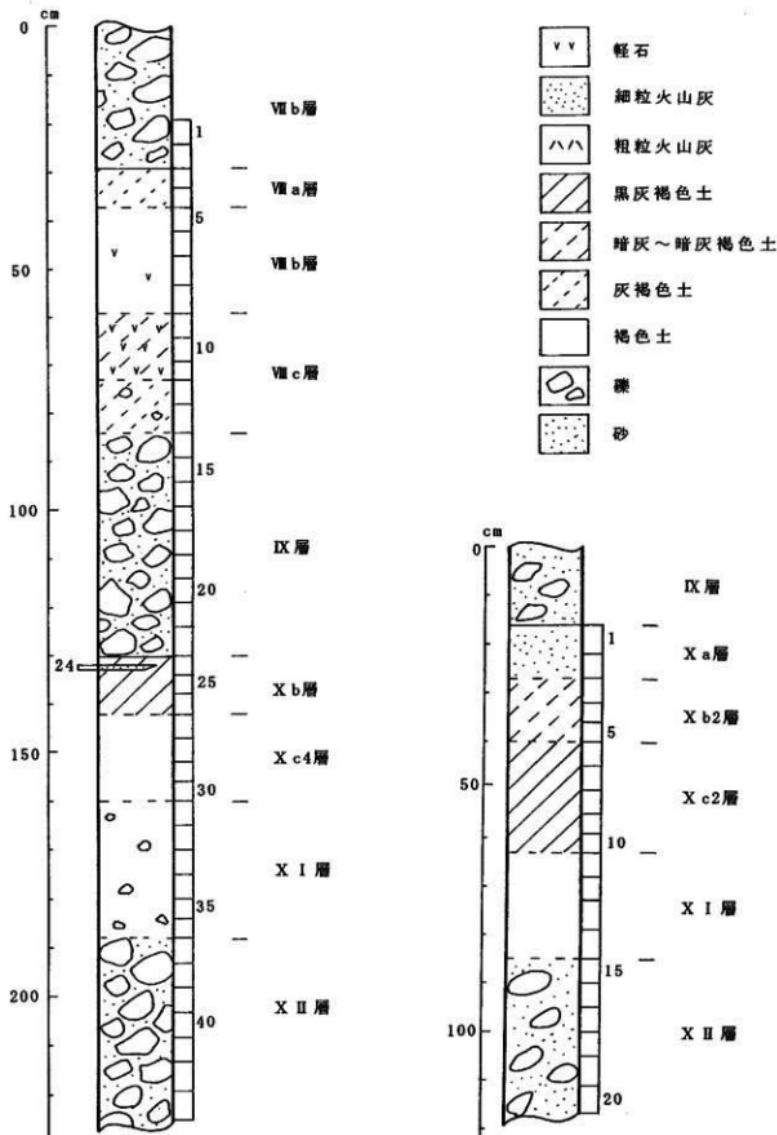
調査区西壁北地点では、下位より亜円礫に富む褐色泥流堆積物（層厚36cm以上、礫の最大径518mm、XII層）、亜円礫～亜角礫に富む褐色土（層厚28cm、礫の最大径33mm、XI層）、若干赤みを帯びた褐色粘質土（層厚18cm、X c 4層）、黒灰褐色土（層厚9cm）、黄灰色砂層（層厚1cm）、黒灰褐色土（層厚2cm、以上X b層）、灰色土石流堆積物（層厚46cm、礫の最大径168mm、IX層）、礫混じり灰褐色土（層厚11cm、礫の最大径4mm）、橙褐色軽石に富む暗灰色土（層厚14cm、軽石の最大径5mm、以上VII c層）、橙褐色軽石を少量含む褐色土（層厚22cm、軽石の最大径11mm、VII b層）、礫を多く含む灰褐色土（層厚8cm、礫の最大径4mm、VII a層）、亜角礫に富む灰色土石流堆積物（層厚29cm、礫の最大径208mm、VII b層）が認められる（図1）。なお、VII b層より上位の黒ボク土中に、約6,300年前<sup>1)</sup>に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978）が認められる。

### (2) 調査区西壁南地点

調査区西壁南地点では、IX層より下位の土層を多く認めることができた（図2）。ここでは、下位より褐色泥流堆積物（層厚32cm以上、XII層）、礫混じり褐色土（層厚22cm、礫の最大径4mm、XI層）、黒灰褐色土（層厚23cm、X c 2層）、暗灰褐色土（層厚13cm、X b 2層）、礫や砂混じり暗灰褐色土（層厚11cm、礫の最大径28mm、X a層）、灰色土石流堆積物（層厚16cm、IX層）が認められる。

## 3. 火山ガラス比分析

### (1) 分析試料と分析方法



調査区西壁の北地点および南地点において、基本的に厚さ5cmごとに設定採取された試料のうち、24点について火山ガラス比分析を行い、火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準と特徴の把握を試みた。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料12gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を同定し、火山ガラスの形態・色調別比率を求める。

#### (2) 分析結果

調査区西壁の北地点および南地点における火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図3および図4に示す。またその内訳を表1に示す。

調査区西壁の北地点では、いずれの試料からも無色透明のバブル型ガラスが少量ずつ検出される。試料28(Xc 4層)付近や試料6~8(VIIb層)付近にその出現ピークがあるよう見えるが、これらの層準は礫が少ない土壤で、実際のテフラの降灰層準を示しているか否かについては判断が難しい。

南地点でも、いずれの試料からも無色透明のバブル型ガラスが少量ずつ検出される。ここでは、試料10(Xc 2層)付近にその出現ピークがあるよう見えるが、やはりこれらの層準は礫が少ない土壤で、実際のテフラの降灰層準を示しているか否かについては不明な点が多い。

### 4. 屈折率測定

#### (1) 測定試料と測定方法

調査区西壁北地点の試料40、試料24、試料10の3点について、含まれるテフラ粒子を対象とした屈折率測定を行って、指標テフラとの同定の精度を向上させることにした。測定には、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッシュン・トラック社製RIMS86)を使用した。

#### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。

### 5. 考察

調査区西壁北地点の試料40(XII層)および試料24(Xb層)に含まれる火山ガラスについては、その形態や色調さらに屈折率などから、約2.4~2.5万年前<sup>a1</sup>に始良カルデラから噴出した入戸火碎流堆積物(A-Ito, 荒牧, 1969, 町田・新井, 1976など)や始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995)に出来すると考えられる。最下位の泥流堆積

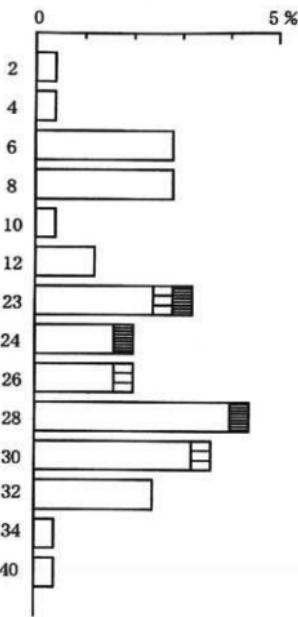
物のマトリクスからATに由来する火山ガラスが検出されたことから、少なくともX層以上の土層は、A-ItoまたはATより上位にあると考えられる。

このことは、南地点のX層においてもAT起源と思われる無色透明のバブル型ガラスが検出されたこととも矛盾しない。

試料10 (Yc層上部) に含まれるテフラ粒子については、橙褐色という色調をもつこと、その層位、さらに斜方輝石の屈折率などから、少なくとも桜島火山形成以前の始良カルデラの噴火に由来する可能性はさほど高くなく、霧島火山に由来する可能性が高いと思われる。

ATより上位でK-Ahの下位にあるテフラのうち、霧島火山に起源をもつ代表的なテフラとしては、霧島小林軽石 (Kr-Kb, 約15万年前<sup>1</sup>, 伊田ほか, 1956, 奥野ほか, 2000) や霧島瀬田尾軽石 (Kr-St, 約9,200年前<sup>1</sup>, 井ノ上, 1988, 奥野ほか, 2000) などが知れられている。各々のテフラに含まれる斜方輝石の屈折率 ( $\gamma$ ) は、1.705-1.707と1.706-1.710 (町田・新井, 2003) で、今回の斜方輝石のrangeの中に入る。

火山ガラス



パブル型 (無色透明)

パブル型 (淡褐色)

パブル型 (褐色)

中間型

軽石型 (ポンジ状)

軽石型 (繊維束状)

火山ガラス

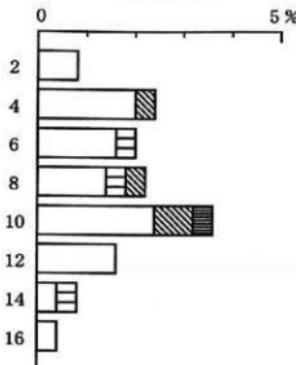


図3 西壁北地点の火山ガラス比ダイヤグラム

図4 西壁南地点の火山ガラス比ダイヤグラム

また、岩石記載的な特徴は明らかでないが、霧島韓国岳スコリア（Kr-Kr、約1.8万年前<sup>\*1</sup>、井ノ上、1988、Imura、1992、奥野ほか、2000）がATとKr-Kbの間にあるらしい。ただし、Kr-Krの岩石記載的特徴は不明である。さらに、Kr-KbとKr-Stの間に層位があるとされる約1.1万年前<sup>\*1</sup>に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ（Sz-S、小林、1986、奥野ほか、2000）の降灰層準を示唆するような軽石型ガラスや中間型ガラスの濃集は今回の分析で認められなかった。

積極的な根拠には欠けるものの、総合的に考えると、Ⅶc層上部から検出されたテフラについては、現段階ではKr-Kbに同定される可能性が高く、Kr-Stに由来する可能性も若干ながら考えられる。今後、遺跡周辺でのテフラに関する調査分析や、Kr-Krの岩石記載的特徴、さらに今回検出されたテフラとSz-Sとの層位関係の把握が期待される。さらに、腐植質土壌について放射性炭素（<sup>14</sup>C）年代が求められると良い。

表1 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
西壁北地点	2	1	0	0	0	0	0	249	250
	4	1	0	0	0	0	0	249	250
	6	7	0	0	0	0	0	243	250
	8	7	0	0	0	0	0	243	250
	10	1	0	0	0	0	0	249	250
	12	3	0	0	0	0	0	247	250
	18	0	0	0	0	0	0	250	250
	23	6	0	0	1	0	1	242	250
	24	4	0	0	0	0	1	245	250
	26	4	1	0	1	0	0	244	250
	28	10	0	0	0	0	1	239	250
	30	8	0	0	1	0	0	241	250
	32	6	0	0	0	0	0	244	250
	34	0	0	0	0	0	0	250	250
	36	1	0	0	0	0	0	249	250
	40	1	0	0	0	0	0	249	250
西壁南地点	2	2	0	0	0	0	0	248	250
	4	5	0	0	0	1	0	244	250
	6	4	0	0	1	0	0	245	250
	8	4	0	0	1	1	0	244	250
	10	6	0	0	0	2	1	241	250
	12	4	0	0	0	0	0	246	250
	14	1	0	0	1	0	0	248	250
	18	1	0	0	0	0	0	249	250

数字は粒子数。bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型、cl：無色透明、pb：淡褐色、br：褐色、sp：スポンジ状、fb：繊維束状。

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 ( $\gamma$ )
西壁北地点	10	-	1.704-1.710 (1.707)
西壁北地点	24	1.498-1.501 (1.499)	-
西壁北地点	40	1.498-1.501 (1.499)	-

屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定法による。（ ）はmodeを示す。

## 6.まとめ

北岡松地区において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、発掘調査で認められた畠層以上の土層は、姶良入戸火碎流堆積物 (A-Ito) とそれに関係する姶良Tn火山灰 (AT, 約2.4~2.5万年前<sup>\*1</sup>) より上位の土層であることが明らかになった。そして、VIIc層上部で認められたテフラについては、霧島小林軽石 (Kr-Kb, 約1.5万年前<sup>\*1</sup>) をはじめとする霧島火山起源のテフラに同定される可能性が高い。

## 註

\*1 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代。

## 文献

- 荒牧重雄 (1969) 鹿児島県国分地域の地質と火碎流堆積物、地質雑誌, 75, p.425-442.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州、姶良カルデラ起源の大崩降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による $^{14}\text{C}$ 年代、第四紀研究, 34, p.377-379.
- 伊豆・喜・本島公司・安国 界 (1956) 宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告、地調報告, 168, p.1-44.
- Imura,R.(1992) Eruptive history of the Kirishima volcano during the past 22,000 years. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., 27, p.71-89.
- 井ノ上幸造 (1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史、岩鉱, 83, p.26-41.
- 小林哲夫 (1986) 桜島火山の形成史と火碎流、文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火碎流等)の特質と災害」(研究代表者 荒牧重雄), p.137-163.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-姶良Tn火山灰の発見とその意義、科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰、第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西川史朗 (1987) 姶良Tn火山灰(AT)の $^{14}\text{C}$ 年代、第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ビストンコア試料を用いた AT火山灰噴出年代の再検討-タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の $^{14}\text{C}$ 年代、地質雑誌, 99, p.787-798.
- 奥野 充・福島大輔・小林哲夫 (2000) 南九州のテフロクロノロジー-最近10万年間のテフラー、人類史研究, 12, p.9-23.

報告書抄録

ふりがな	ひがしかわきたちくいせきぐん				
書名	東川北地区遺跡群				
調査名	県営經營体育成基盤整備事業東川北地区に伴う東川北地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書				
卷次					
シリーズ名	えびの市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第41集				
編集者	東真一・中野和浩				
編集機関	えびの市教育委員会				
所在地	宮崎県えびの市大字大明司2146-2				
発行年月日	2005年3月31日				
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	調査期間	調査面積	調査原因
東川北地区遺跡群	えびの市大字 東川北字古 屋敷・内牧・ 彦山	9 2005 2006 2007 2014	2000/05/10～ 2001/03/30 2001/04/06～ 2001/07/20 2003/12/15～ 2004/02/16	32,000m <sup>2</sup>	県営經營体育成基盤整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
手仕山遺跡	山城	中世	堀切・犬走り状遺構	縄文土器・石器	
古屋敷遺跡	集落	弥生 古墳 古代 中世	間仕切り住居 竪穴式住居 竪穴状遺構 掘立柱建物 土壤墓 溝状遺構	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・綠釉・墨青土器・黑色土器・布痕土器・青磁・白磁・青白磁・青花・石器・鉄器	
内牧遺跡	集落	古墳 古代 中世	竪穴式住居 竪穴状遺構 掘立柱建物 土壤墓	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黑色土器・青磁・白磁・石器・鉄器	
彦山第5遺跡	集落	縄文	集石	縄文土器・打製石器	

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第41集

## 東川北地区遺跡群

県営経営体育成基盤整備事業東川北地区に伴う  
東川北地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

平成17年3月

編集・発行 えびの市教育委員会  
えびの市大字大明司 2146-2

印 刷 (有)ソーゴーグラフィックス  
熊本県人吉市下城本町 1426-1